
それはひとつの奇跡

明日天気になあれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それはひとつの奇跡

【Nコード】

N8063Q

【作者名】

明日天気になあれ

【あらすじ】

告白する日、こんなときに限って地震が起こり、俺は死亡、いまでも彼女の泣き声が聞こえる。目をさますと、ただっ広い草原、混乱しながら歩きだすと魔物に出会い、追いかけられる始末。城がみえ、救いかと思えば、魔物が背後にいる所為で敵かと勘違いされ、やけくそになって戦ってみると、自信が意外と強いことを知った。この体はなにものなのだろう、なぜ俺はここにいるのだろう、そう疑問を感じないわけにはいかない。混乱しながらも運命に身を任せ、俺は歩いていくことを決心した。

それはひとつのぶろろーぐ（前書き）

はじめまして、この小説の作者です。

文才などない！ってタグに入れようかと思えば友人に注意されたのでやめておきます。

過度な期待はやめてください、いや本当に、いやお願いしますって。

作者は書いていくうちに成長すると思います、… たぶん、おそらく、きっと……… だったらいいなあ。

それはひとつのぶろろーぐ

死んだ。

いきなりそういわれてもなにことかわからないかもしれない。
でも、僕は死んだのは事実だ。

その事実だけで俺はこれほど絶望したことはない。
いまでも彼女の泣き声が聞こえる。

『錦戸さゆり』彼女は僕の好きな人だった。

——はじまりは地震だった。

震度はいくつだっただろうか。

おそらくだが、関東大地震というやつだ。何年にもつもりつもっているなどとテレビではやっていたが、まさかこのときにこなくてもいいだろう。

その日は彼女の誕生日だった。幼い頃からいつしょにいた彼女へとプレゼントを渡し、告白しようとした日だった。

小さな箱を大事そうにもって彼女の家へいこうとしたときだった。
ぐらあつ、という大きな揺れを感じたが、日本人なので慣れっこ、
だがそれがいけなかったらしい。

天井がいきにくにふってくる。それに押しつぶされて、俺は意識を失った。

まったく、机に隠れていれば生きられたかもしれないのに。

そのまま死んではなかった。

目を開けると、真っ暗な闇が広がっていた。

上から小さく光が見え、それは希望のようだった。

手をあげようとするが、あげられなかった。天井の一部であろう木が邪魔をしてあげられない。

ならば助けを呼ぼうと思い声をはりあげる。

「お——」

声をあげようとしたときだった。

その声を遮る音が聞こえる。

ヘリコプターの音、マスコミかなにかだろう。これほどまでにイライラとさせられたのは初めてだった。

はやく、はやく去れよ、そう思いながらまっっていると、足の痛みに気づく。確認しようと、あまり動かない足を無理やり動かすとズキリと傷んだ。

となりの足にこすりあわせると、ぬるりとした感触。

——ああ、血かな。

それもとんでもない量、アドレナリンだったかな？それがでて気づかなかったのだろう。

気づいたときにはもう遅い、ズキズキと痛みが蘇ってくる。

どんでもない傷み、どうして今まで気づかなかったのだろうと疑問に思うほどの傷み。

血の量も半端なものではないらしい。

部屋に置いてあったものだろうか、なにかが腹を破って突き刺さっ

ているような感触。

なんて曰だ、なんて不運だ、なんて最悪なんだ。
心の中でなんともなんとも今の状況の苛立ちにたいする言葉を吐き出し続けていると、音が病んだ。

あいつらが、行ったみたいだ、バラバラとうるさかったヘリコプターの音がやんだ。

それがどうしても希望の光にみえて、痛む体を無理やり動かして叫んだ。

「誰か…！」

そう叫んでからなんとも止むことなく叫び続ける。そのときだった。

「たけるくん!？」

さゆりの声が聞こえた。

それがたまらなく救いの手のように聞こえ、俺は声をはりあげる。

「さゆりっ！」

「よかった、たけるくん、たけるくんっ…」

泣きじゃくる彼女に、俺はなんとも声を張り上げる。

彼女は俺のいる場所をさぐっているようだった。

だが、なんとも悲しいことや、再度現れたのだ、あいつらが。

バラバラと騒音をたてて、それは出現した。その音の発生源のものを、ロケットランチャーがあれば問答無用にそいつにむかってぶっ放していただろう。

彼女のヒステリックな声がきこえる。何度も何度も「うるさいうる

さい」と叫ぶ声がきこえる。

俺はふと、ああ限界だな、と思った。
あと十分ぐらいは耐えられるかもしれない。
それが去っていくまでに耐え切れるかどうかはわからない。

ゆっくりと目を閉じた、

そしてその音がおさまるのをまつた。

おさまったとき、俺は淡々と話し始める。

「なあさゆり」

「たけるくん、まつててね、すぐに…」

「俺、お前のこと好きだったんだ。」

そう言い放つと泣きじゃくる声が大きくなる。

「もう…いいがらあつあとでぎぐがらあつ」

俺が言うのを静止する声、さゆりも俺が限界かもしれないといっていることに気づいたのだろう。

泣きながらそれをおし止める。俺はそれを無理やり無視して続ける。

「なあ、この家とかたぶん自衛隊とかがどうにかすんだろ？そのときさ、その、チェック柄の箱見つけてくれたらさ、もらってくれよ。」

「やだつやだあつ、たけるくんの手から受け取りたいの…」

そのことを聞いて、俺は涙を流した。

だが、ときというものはくるもので、俺は心の中で、ああだめだな、なんて考え、目をつぶる。

「さゆり、大好きだ。」

そうポツリともらしたとき、俺の意識はブラックアウトした。

そしてブラックアウトして、圧迫感がなくなり、体が軽くなる。
これが死というものだろうか？ まあいいや。

目をとじて——とじ——とじ？

目をあけた。

死んじやいなかったのか！ 圧迫感がないということは助け出されたのか！？

やった！ さゆり！ どこ——

どこだ、ここは。

「なんだここは。」

目の前には草原が広がっていた。
そのみどりは反射して輝いて見えた。

「え——え？」

理解不能、さっぱり意味不明だ。だけど目の前のものは確実に存在している。

ここが天国？なんてバカなことを考えて起き上がる。
自分の服をみようと視線をしたにさげると、鎧をまとっているのがみえた。

「あ、つれえ？」

ゆっくりとゆっくりとそのばを一回転。
後に祠があった。

どっかのファンタジーでは、その祠によって召喚されたなんてことがあるだろうが、そういうときは神様っぽいなにかがでてくるはずだがその祠がどこからどうみたってただの古びた祠、そんな力があるなんてものは冗談でもいえない。さびて風化したような祠以外になにかあるといえば森と草原。
さて、ここはどこだろうか。

持っている剣をなんとか抜いて、納めてを繰り返す。
抜いて何度か振ってみるとそれはまるで自分の体の一部かのように触れた。

剣をみると、それはそれは聖剣とよべるほどの美しさにみえる。

鎧をみる、磨けば美しいだろうが、土によこれてすすけていて、歴戦を共にした鎧かのように所々に傷がある。

鏡があれば自分の顔がみたいところだが、そんなものは残念ながらなく、しかたがないからため息をついてすぐに空気を肺に収めた。
そして――

「うわあああああああああああ！？」

とりあえず――叫んだ。

それはひとつのぶろろーぐ（後書き）

全部読んでくれたとは…ッ！

よんでなかったら

『あwごめんよんでなかったw w w w』といった感じにコメント…
はいらないですねはい。

これからよろしくお願いします。
アドバイスとかお願いします。
作者は理系っぽいので、そこまで漢字は得意ではないので、間違え
がたくさんあるかと思っています。

第一話目『おそろくそれははじまりだった』（前書き）

― 前回のあらすじ ―
死んだと思ったら草原にたっていた
何がおこったんだ。

第一話目『おそらくそれははじまりだった』

誰でもいい、いきていいてくれ！

そう心の中で叫びながら俺はひたすらに走り続ける。

それが願望だ、それは理解している。

だけど俺は心の底からで叫んでいる。

こちら、武、生きている人、いますか。

「誰もいいから助けてくれ！」

それは心の中での最高の叫び。

息はきれていない、体が羽のごとく軽い。

風のような疾走。だけどそれも限界がある。

その限界に恐れながらも走り続ける。

きつと俺は、諦めない。

きつと俺は、走り続ける。

限界すら超えてみせる。

「うひゃあああああ！」

どっかのゲームで出てきそうな魔物たちが俺を追いかけてくる。

――時間前

現実逃避しながら俺はこの現状を理解しようとすることにした。
きている鎧、腰に挿したさやに収まる剣。
それらふたつだけでも現実逃避は容易。

それに拍車をかけてこの草原。
そう、とりあえず現状を整理してみよう。

・鎧をきて、剣をもっている。

・草原につつまっている。

・俺は死んだはず

この三点が重要だ。

さて、みんなもわかったかな？俺は簡単にわかった。

そう、俺はコスプレイヤーに拉致されたのだ！（意味不明

しかし、それに臆する俺じゃない、なにか案を考え、一刻も早くここから逃げ出さなければ！

幸いにも敵は油断している、なぜならこんな草原に放置するほどの

バカなのだ！

ならばどうする？俺はどうすればいい？

ガリガリと頭をかいて案をだそうと考えるが、とりあえず逃げるとしか考えつかない、それからどうすればいいのだ！？

そのときだった、頭の上からパラリと髪の毛が落ちていく。

それを思わずひろうと、色に気づいた。『金髪』そう、金髪なのだ。

本格的だなあ、なんて現実逃避をかまして、とりあえずさつさこのウィッグだかカツラだかわからないやつをはずそうなんて思い立ち、引っ張ったのが関の山。

この現実逃避はバラバラに崩される。

頭皮との結合を確認。

いつ染めた！なんて考えても意味はない、さすがに気絶していようとキックモノダ。

俺は深呼吸をし始める。動悸が激しい。

落ち着いてきたところで手足の震えを感じる。

「これは——よくある異世界来訪系のようなものではないか！？」

やっと現実がみえてきた。異世界来訪、それは小説の中でしかないものだと思っていたが、まさかこの身に起こるとは。

現実逃避を二重にかましてやろうかと思ったが、それでは解決にならない。

もう一度深呼吸をして俺は気を付けをする。

鎧をきている、剣をもっている。という観点から俺は憑依というものを経験しているのだろう。

この体は何者かはわからない。

だが今は生きることを考えるべきだ。死んだらこの体の人にも申し訳が立たない。

荷物を後で確認するとして、今は街を探すべきだろう。

今確認しても後で確認するのと同じだ。

だががむしゃらに探してもそれは自滅していくのみ、ではどうすればいい？

「とりあえず、高いところから見渡してみるか。」

そう思いおかのうえを見上げる。なかなかの高さだ。

異世界というし、ここまですなにも手をつけられていないのをみると文明はあまり進んでないとみる。それならば過去あったみたいに城みたいなものも建設されてしかるべきだと思う。

高いところにいけば木も邪魔にならない。

そう思って歩きだす。

その足取りは軽い、とりあえず丘の上へと走り出す。

「よっしっし…」

いきなりエンカウトした。

正直もう嫌になってくる。

いきなりのエンカウント、そして敵はみたことがない魔物っぽいもの。

もうあれだ、さすが異世界とかふざけんなよ。

そして冒頭にもどるわけだ。

すでに一時間は走っている。

それでいて疲れがみえないこの体に驚いているが、精神は疲れるものだ。

いいかげんにしてほしいと心の中で思ってるし、いいかげんにしろよといってみるものの、相手は魔物、通じるとは思わず。走り続ける。しかもこの魔物ども、増えている。おいオマエラ、鬼ごっこ
の横入りはやめようね、いや本当に、っていうかもう一抜けだから、
お願いだから。

そのときだった。

城が見えた。

ほんつとくに救いだと思った。

全力疾走を開始し、二時間、すでに長距離マラソンをフルで走る距離は走っただろう。

門が目の前にみえ、全力疾走もさすがに疲れてきた。

さて、問題だ。

魔物の軍勢をつれた俺が城へと走っていつてみる。

さて、兵士はどう思うでしょうか？

正解

「魔物の軍勢をつれて攻め込んできたぞお！？」

「いや、違っんです！襲われているだけなんです！」

「貴様、そうやって門を開けたところで国に攻め入るつもりだろう！？剣をもっているならば戦え！」

無茶言っな、一般ピープルな俺にどう剣をもって戦えと、目をつぶ

つて「えーい！」なんていいながら上下に降るのが関の山だぞ。そうやって降っている自分を考えてみる。果てしなく気持ち悪かった。

「貴様ア、体格をみて、鎧をみれば力量があることはわかっているんだ！」

いやまてこの野郎、俺の心を読めよ、俺のチキンハートを読めよ。心の中でパニックになって頭の中でサンバの音楽がなっている俺の心を読めよ。

向かえば三秒で敗れること間違いなしだからな？

警戒をやめない門番に、俺はもうやるしかないと剣を引き抜く。その輝かんばかりの剣をもって、俺は構えてみる。

「（…？）」

すぐに、剣がぶれることなく構えが出来上がる。それはまるで慣れているかのように。

体が慣れているのだろうか、憑依したものはどこぞの剣士だったのだろう。

一体目が襲いかかってくるので、それを除け、回転しながら遠心力を利用し引き裂く。

それはまるで溶けかけたバターをきっているかのような感触。

そしてそこまでの動作にはいるまでの体の判断力。その二点に驚きを隠せない。

二体目が来る。

それを剣でおし止め、はじき飛ばしたあとに上からまっふたつにたたききる。

血飛沫に思わず目をつぶりそうだったのだが、反射とは裏腹に、その体は血を除ける。

「（なんだこの感覚…！っち、もうやけくそだおらああ！）うおおおお！」

咆哮は獅子のごとく、突進は猪すら凌駕する。

かかってくる魔物を空中で一刀両断すると、飛び上がり、重力を利用して力を倍増させ叩き切る。

横からかかってきた魔物は再度回転し、空中で分断する。

「すげえ…」

後ろから門番の声がする。あなたも戦ってほしいと思うのは間違いなのだろうか？

飛び上がる魔物は振り下げた剣を振り上げ、はじき飛ばす。

振り上げた剣をさらに振り下げてかかってくる魔物を叩き切る。

横からかかってくる魔物は軽く後ろにとび、よけた瞬間に足のバネをつかって突撃する。その力をつかって引き裂き、魔物はみるみると少なくなっていく、ついにはいなくなる。

「疲れるな…。」

二時間走り続けたとしても、少々つかれしか感じなかったこの体が大量の汗をかく、それほどまでの重労働だったのだろうか、無我夢中で剣を振っていた俺にはあまり感じなかったものだが、汗を腕で拭い、顔をふって汗をふるい落とす。

門番のほうをみると、こちらにやってくるのが見える。てをふってやってくるその様子には、何故助けなかったし、ということに対する憎悪を自分の中に感じた。

「お前すごいなッ！」

その暑苦しい笑みには殺意が沸いた。

——そのときだった。

『ヴォアアアアアッ』という獣の雄叫びを感じる。その獰猛そのうな声にはさすがに冷や汗を流す。

後ろをみると、真っ黒な怪物がその存在感を振り向きながら俺を見ている。

かおをみればわかるものだ、あれは怒っている。なにかはわからない、俺が切り捨てた中に同種族でも混じっていたのだろうか、だが俺はゆっくりと剣を握った。

強く強くもつ、冷や汗を流し続けるが、逃げられはしないだろう。

「うあ、うあああ、手配魔獣だ！し、しかもAクラスのッ！」

門番の叫びの『手配魔獣』というものに疑問をもったが、俺は剣をぐっと握ったまま、飛び出す。

「ハアアアアアアッ！」

魔獣は雄叫びを上げながら攻撃を繰り返す。ただの殴り、ただの殴りなのだが——それは、当たれば死を意味するもの。

それを感覚で流す。かすった剣がビリビリと痛むが、それは一瞬で消える。

「亜アッ！」

懐に入った。縦に思い切り切りつけると、キレイに引き裂いて行く。だが、相手もよくわからないがAランクといったことに恥ずことはない強さ、飛び退いてよける。だが切り裂きはした。

ダメージを与えられたことにちょっとホッとするもつかの間、相手は――

突撃を、はじめた。

それは異常なほどの速さ。だが、見切れる。

飛び上がると、その頭を台にして回転しながらよける。

そして――反射的に唱えた。

「火を放て、焼き尽くせ。」

命令するかのごとく、そう言い放つ。すると火炎の竜巻が発生する。

獣の叫び声が巻きおこる、振りほどこうとするがその炎は無限に続く。

そしてついに――動かなくなった。

「うあ――ハアッハアッ」

緊張のとけたことにより、息を吸っていなかったことに気づき、息を吸い始める。

立ち上がると、俺の手を握るものがいた。

みると――門番がキラキラとした気色の悪い目で俺をみているのを見た。

嫌な予感しかない。

「すげえ、すげえよ！」

歓喜するそのおっさんは、俺の手をブンブンとふる。

「手配魔獣、しかもAランク、そしてあの魔法！あれほどの魔法、国一番の魔術師くらいしかつかえねえ！」

そう歓喜するおっさんに、俺は肩をがっしりとつかむ。

「――と、とりあえず説明してほしいことがある。」

「なんだあ？教えてほしいことがあるなら教えてやろう！お前さんほどの剣士はじめてだ！」

「とりあえず、この世界について」

「——は？」

素っ頓狂な声をあげて、門番は俺をみている。
俺はワラにもすがるような思いで、門番へと質問を始めた。

第一話目『おそらくそれははじまりだった』（後書き）

クツ、話の入り方も終わりがたもわからない…！

第二話目『3つの国、8つの聖堂、そして伝説』（前書き）

―前回までのあらすじ―

死んだら異世界にとばされ、魔物に追いかけられ国についたと思えば追いかけてくる魔物の大群を指揮していると思われ戦ってみたならなんか俺強かった。

強いやつに憑依しているということはわかった。

第二話目『3つの国、8つの聖堂、そして伝説』

門番の名前は『ファイ・エネーシア』俺の名前を覚えてくれといわれても、たぶん大和武といえは不思議がられることはあたりまえなので、『イリス・ルヴェル』という名前を勝手に付けて自己紹介をした。

こっちはまったく自己紹介してないじゃないか、などの誹謗中傷は受け付けない。

「で、この世界についてききタイのか？」

「ああ。」

そう返答をすると、不思議そうに門番は俺をみる。この世界についてききたいというなら、お前はどこで生きているんだ？と言いたいのであろう。

さて、なにか言い訳を考えなければ。

「森の奥深くに最近まで住んでたんだ。」

そう言うと、門番は納得したように頷いた。そしてこの世界について説明を初めて行く。

「この世界は『シルヴェアニア』という名前だな、三つの国で成り立っている。」

世界そのものが三つの国？どういうことだ？

疑問に思ったが説明に横槍をいれてもしょうがない、とりあえず聴き続けることにする。

「三つの国、それはひとつひとつ分野にたけている。さて――」

説明を簡略化させてもらう。

・ケルベドランド

産業が盛んで、貿易等で国を成り立たせている国

・ファルディアス

観光、そのうえに農業が盛んで、もつとも美しい国

・エリシアス

軍事系がとてつもなく強く、軍事兵器などを中心に行っている。

この三つがあるらしい。

そしてそのうちに、8つの聖堂があり、それがあある場所が実質国の一番発展した都市、もしくは二番目か三番目らしい。

『火の聖堂』

ケルベドランドにある聖堂で、火の神を祀っている。

『水の聖堂』

ファルディアスにある聖堂で、水の神を祀っている。

『地の聖堂』

ケルベドランドにある聖堂で、地の神を祀っている。

『風の聖堂』

エリシアスにある聖堂で、風の神を祀っている。

『光の聖堂』

ファルディアスにある聖堂で、光の神を祀っている。

『闇の聖堂』

ケルベドランドにある聖堂で、闇の神を祀っている。

『時の聖堂』

エリシアスにある聖堂で、時の神を祀っている。

『空の聖堂』

ファルディアスにある聖堂で、空間の神を祀っている。

この8つの聖堂がある場所が国の重要な場所らしい。
その場所に城などがたっているらしい。

「じゃ、ひとつ聞けど——この国はこの?」

「いや、ここは中立都市、記念都市と呼ぶ人もいるけどね。」

「記念都市?」

「記念都市、何千年も前の伝説でね、『魔王』という存在がいたらしいんだけど、それを倒した人の出身がここなんだって。」

「魔王と勇者の物語のはじまりの地、ってこと?」

そう聞くと、コクリとファイはうなずいた。

「この都市の名前は『レシエント』中立と平和の象徴。そのために

すべての国から魔法使いを教育する機関がある。その名は『レシエント魔法学院』」

「そのまんまだな。」

そう返答すると、ファイは苦笑いを浮かべる。

「そういうなよ、たぶんこれで大体のことは話したぞ？勇者の物語はこの国の図書館にでもいつてくれ、とりあえず森の奥にいたんだからどうせ金もないのだろう？手配魔獣を金にかえれば、このレベルだしひと月は楽できるんじゃないか？」

Aランクの名に恥じない金をもらえることに正直安堵した。

金も持っているかもしれないが、それはちゃんと落ち着ける場所をみつけてから確認するつもりだった。

「じゃあ、ヨロシク頼む。」

「ああ、任せておけ、っと、とりあえずこいつを運ぶか。」

そういつて魔獣を指す。そして苦笑いをしながら「俺もてないからよろしくたのむ」といつてさっさと門に戻ってしまった。

俺は持つていけるか分からなかったが、とりあえず魔獣の死体を担いで見る。

なんてちーとぼでえー、軽々と持ち上げる自分に驚きながらも、俺は魔獣からたれている血がかからないために引きずることにした。

―国内

ファイがまっついていて、先にいつてこつちだと指をさす。
どっかの牧場物語の村長の村の説明みたいな感じだ。

引きずっていくと、人の視線を感じ、そちらをみる。そうすると町娘のような人と目が合い、そらされた。

疑問に思っていると、ファイの声が聞こえたので思考を中断し、そちらに視線を戻す。

指しているのは建物、近づくところ『魔獣対策部 本部』という文字が見える。

そして目の前の掲示板に大量にビラが貼ってある。

それをみながら、俺は玄関の前の二枚トビラをあける。

扉一枚の面積じゃ魔獣が通らないかもしれない、そう思うとファイがもう一方のトビラの鍵をあけ、入るようにする。危険な気遣いはできないが、こういう気遣いはできるやつなんだな。

中に入って魔獣を置くと、そこには色気を振りまく女性と、屈強そうな男性がいる。

「おうっ、お前がこの魔獣を倒したのか？倒せる奴なんてこの国でもひとりくらいっていうのにやるなー。」

そう人懐っこそうな笑みを浮かべた屈強そうな男性の似合わなさに、一瞬固まるが、すぐにハツとする。

「とりあえず倒したのですが——これからどうすれば？」

そう聞いてみると、女性は色気のある声で返答をしてきた。

「とりあえずここに名前と倒したという証明を書いてくれないかしら」

そう言われ、近づき、その証明をみる。

『討伐に対する証明』そう書いてあるのを確認する。見たことがない文字だが、読める。

この体の恩恵というものだろうか、たぶん染み付いたものは取れないのだろう。

文字なんてものは読むというよりみればわかるといったものだからだ、戦闘もこの体は当然のようにしていたのだろう。

渡してくる女性のその細い指からペンを受け取ると、書いていく。

『イリス・ルヴェル』そう書いていくと、スラスラと書けていく。

書き終えて渡すと、コクリとその女性はうなずき、その紙をバインダーのようなものにいれると、袋のようなものを渡してくる。

「200000エリスよ。」

「エリスっつーのは、この世界の通貨だ。ついでに100エリスでりんご一個くらいだ。」

ファイのその声にうなづく。

俺の世界での円という通貨単位とほぼ同じなのだろう。

りんご一個１００円というのは質によって違うだろうが、質をあるていど良くするとそれぐらいにはなるだろう。

それを受け取り、ペコリと頭をさげる。

「とりあえず、自己紹介をしとくべきだと思うわ。これからさき、お世話になるかもしれないし。」

頭をあげると、そう女性が言い放つ。
それはたしかにそうかもしれない。

「では、私はイリス・ルヴェルと申します。」

そういつて自己紹介をすると、色気をもって微笑みをもってちょっと息を女性がつく。

「かたいわね、私はフィリーネ・ガルヴァよ。」

「僕はメイス、メイス・ターニヤだ。どっちが名前なんだとかよく言われるけど、メイスって呼んでくれ！」

ほほえみながら、一方は元氣良く自己紹介をしてもらう、メイスは気持ちいいくらいの挨拶だ。

コクリとうなずくと、「よろしく」と手をさしだす。

フィリーネもメイスもその手を握ってもらった。

「よろしくね。」

「よろしくなっ！」

その声を後に、外へとでる。ファイもそれについてくる。

「さって、ファイ、とりあえずお礼に飯でも奢るよ。」

「おう、そりゃうれしいな。」

そういつて笑いあう、この国の男性は人懐っこいのだろうか？
思わず笑みを浮かべてしまう俺を感じながら、俺はその後で宿を教え
てもらおうと思った。

— side ????

暗い暗い世界で彼を待つ。

ときが経つことに彼のことを思い出せなくなってくることに嫌気が
さしてくるけれど、私は彼をこの部屋でまっっている。

「—————」

歌を歌おう、彼が気づいてくれる。

この歌は彼が口ずさんだ歌。

彼のお気に入り。

彼の気配を近くに感じとることができることに、嬉し涙を流す。

彼はなにもの？

ワカラナイ

でもきっと、彼は私の――大切な人だったはず。

l s i d e e n d

l s i d e 主人公

ファイが教えてくれた店は安くて上手いという店。

異世界の料理というから、いろいろなことを考えてみた。

日本の料理は美味いと聞く、口に合うかどうかはわからないが、食べてみたいという好奇心があった。

ファイと同じ料理をたのみ、恐る恐る一口。

「美味い……」

そのひとことにファイは嬉しそうに笑う。

「おう、この店は安くて美味いッ。」

そうにこやかなファイにうなづくと、俺はさらに食べるスピードをはやめる。

ガツガツとくっっていると、ふいに視線を感じ、そちらをみると、ウェイトレスと目があった。

ウェイトレスはすぐに視線を外し、パタパタとかけていく。

その様子に怪訝になったが、ファイの視線を感じたので戻す。

「ふおうふいふあんふぁ？（どうしたんだ？）」

リスのように頼いっぱいに食べ物を含んだファイに、なんでもないと手振りで示すと、ファイは食事に視線を戻した。

美味いせいもあってか、すぐに食べ終わる。

外に出ようとすると、「ありがとうございましたー！」という店の主人とウェイトレスの声が響きわたる。ウェイトレスの声がうなずっているように聞こえた。彼女はきつとアルバイト初日なのだろう。がんばってほしいな、なんて思いながら俺はファイに宿屋について聞くと、ついてこいといわれ、宿屋を教えてもらった。

その宿屋で、部屋を取ると、部屋があまっているようなので鍵をうけとった。

「じゃ、俺は門番にもどるぜ。」

ファイは部屋にはいった俺にそう告げると、手をヒラヒラとさせる。

「なんかあれば言えよー！昼飯で手をうつてやる。」

そうにこやかに笑っていう彼に、苦笑しながら手を振り返す。
ファイはそういつてすぐに消えていった。

俺は荷物に視線を戻す。

小さな小袋に視線を落とし、その中に手を突っ込んだ。

巨大な瓶が出てきた。

「法則無視ッ！」

さすが異世界、そんな馬鹿げたことを思つて、俺は瓶を引き抜く。
チャプンツという音をたてて、内部の重さで瓶は揺れた。
内部には青い水っぱいものがいっている。
だがそれは綺麗な海のように青く美しい。

思わず、それを一口。

底から元気が湧いてくる、そんな感覚がして俺はその招待をおおま
かであるが理解した。

FFでいえばポーション、そういったもののだろう。

効力はよくはわからないが、でかい瓶を眺めながらも一口飲んで見る。

疲れがうそみたいに消えた。

「——ふう。」

息を吐き、瓶の中にあるものがまったく減っていないことに気づく。無限にある、ということはないだろう。瓶と水とは思えないほどにこれは重い、この中に入っているのは無限ではないが、この重みの分なのだろう。

ポーションのはいった瓶をコトンと机に置く。

そしてさらに袋をさぐる。

本のようなもの、青紫の透き通った液体の入った瓶。

本はペラリとめくると手書きなのがわかった。印刷技術が低いのかもしれないが、袋の中から書かれている文字と同じ太さがかけるペンがでてきているのを見て、俺の体の元の使用者が書いたものだと理解した。読めば魔法について書かれていることを理解した。あとで読もうと思う。

高級そうな箱をみつけ、それをおそろおそろ開けてみる。

「うおっ!？」

8つの光が俺の中にはいていった。
思わず服を脱いでみる。

そこには色とりどりの紋章があった。

8つの、紋章？

なにがなんだかわからない、これはなんだ？

混乱したが、扉越しのノックで意識を取り戻し、ドアをあける。
宿屋の主人が笑顔を浮かべてその場にいた。

「夕食です。」

そう言った宿屋の主人に「ありがとう」と告げると、俺はさきに行った主人を追いかけるように、部屋に鍵をかける。

そして、反射的に口が『閉じる、護れ』という言葉を発する。

思わず立ち止まってなぜそんなことをいったのかわからなかった。だがこれもいつもやっていたことなのだろう。

部屋に結界のようなものははられることを感じながら、夕食の場所へといった。

夕食は視線をひたすらに感じた。

だが気にしないことにした。国に入ってから幾度となく向けられる視線、熱いまなざし、それがなにを示すかはわからないが、俺は夕食をすぐに食べ終え、戻ってくる。

「——なんだこれは。」

戻ってきた俺が目にしたものは、ヒビの入った結界。だが破られてはいない、すぐに結界を解き、室内に入り瞬時に結界を張り治す。

内部は荒らされていなかった。そりゃ、結界は壊れていないからどうだけでも。

ホツと安堵をして、ベッドに腰掛ける。

薬品で疲れはとれたとしても、精神的な疲れは残っている。

俺はゆっくりとまぶたをとじ、ねることにした。

―夜

音がしない、音がしないからこそ聞こえる音がある。
ゆっくりと、覚醒した。

『――』

歌が、聞こえた。

もつと寝たいという体に反し、精神はゆっくりと起き上がる。

宿の外へとでる。そしてまるで操られているかのようにたどたどしい歩きをしながら、俺はゆっくりとその声がする場所へと歩きだす。街の、小さな森林。

小さなもので、子供の遊び場にしかないその森林は、日本の小さな公園のような大きさに、俺はその公園の下に、歌を聞いた。

思わず、その地に手をつかむ。

その瞬間、光が発生する。

黄色い魔方阵が起こり、思わず腰の剣を引き抜いた。だが抗えない。
魔法陣の発行が収まると共に。

——イリスの姿はそこから消えていた。

第二話目『3つの国、8つの聖堂、そして伝説』（後書き）

ふう、簡単ではありませんね、小説を書くということは。
書き方というもののアドバイスがあればうれしいです。

第三話目『妖精と魔法』（前書き）

—あらすじ—

死んだら憑依した、なんか強かった。まもの倒したら金がもらえたので宿にとまる。ファイという門番と友達になった。

第三話目『妖精と魔法』

—どうしてこんなことになったのだろう。

頭の中は混乱して、とりあえずこの状況を無理やり忘れているのが今の状況。

宿もとり、一週間程度落ち着いて考えようと思ったが、この状況。

魔方陣の起動。

黄色に光り続けるその形をみるに、そういうしかなかった。

魔法、存在しているといわれているし、反射的とはいえ、自分も使った。

だが、この光景を俺は茫然と見るしかなかった。

落ちて行く。目の前が一瞬真っ暗になったかと思うと、真っ暗な空間に落とされる。

茫然としながら、手探りで壁を探しておく。壁というものは安心できるものだ。

暗闇でもなにかあるということを理解できる。ここは現実なんだとすることができる。

壁がなければ宇宙空間にほっぽり出されたような、恐怖感を感じパ

ニツクになつてしまうものだ。

フラフラとおぼつかない足取りで壁をさがし、見つけたときには安堵する。

だが、触った所から緑の光が発行したことに驚き、手を話す。

『見つけた』

そう女性の声がした気がした。

呆然としていると、壁に線が入っていき、自信がいる場所を照らし始める。

——どうやら、長い通路にいるようだ。

緑の光は、後ろをみると続いている。だが前をみると続いている。

一歩、あるくと、俺がいた場所のみどりの発行がきえる。

「（いけ、もどることはゆるさないってことか。）」

心の中で悪態を突きながら歩きだす。

その光はどこまでも続いているようにみえて、不安になってくるが、どうにかその気持ちを抑えてゆつくりと歩きだす。

「（歌…？）」

かすかだが歌声が聞こえる。それもみどりが続く方向にだ。歩き続けることを決心し、そのまま歩いていく。

そうすると、みどりの魔方陣が書いてある広間にでた。

剣を引き抜いて、少しずつ、少しずつその広間にはいつてみるが、何も起こらない。
だが気は抜けない。剣を鞘に戻さず、そのまま魔法陣へと近づいていく。

——そこには台があった。
そしてそのうえには——

「妖、精…？」

透き通った羽根をもち、赤い髪をした女の妖精がそこにいた。
妖精は歌を歌っていた。その声は透き通るような声で歌い始める。
それは幻想的で、思わず聞き行ってしまう。
そしてふとその歌がとまると、俺のほうを妖精がみているのに気づく。

「あ、う…」

妖精が何かをいおうとして、何をいえばいいのかわからないといった感じのうめき声と顔をする。
そしてすぐに妖精は決心したような顔をし、その小さなカラダを立ち上げらせ、こちらをむく。

くるか…！？なんて構えてみるが、それは裏切られることとなる。
バツと飛び上がると、妖精はなんと——

「ご主人様アアア！」

ご主人様と俺を呼んだのだ。

「ハア——！？」

「えっと、ご主人様ア！私はいままで一時たりとも…忘れてますけど、忘れてませんよ！会いたかったですご主人様！！」

飛びかかってくる妖精をキャッチして、妖精のいつていることを聞いてみる。

ご主人様〃俺

妖精の相棒だった〃元の体の人

憑依しました

なんていつてどんな顔が帰ってきてくるだろう。というか絶対に危険な人を見る目でみられる。

ここはどういつてごまかそう。

「すまない——俺には記憶がないんだ。だから、教えてくれないか？」

聞き出す作戦にでてみた。

「え」

……

「なんだ、今のすげー嫌そうな顔。」

「そんなことないですよー、ご主人さ・ま」

そっいつてクネクネとごまかそうとはりきっている妖精をじっとみる。

じっとみる

じっと――

妖精が滝の汗を流し始めた。

「あーもつつ忘れましたよ！？悪いですか！？」

まさかのギャク切れをおっぱじめたこの妖精に啞然するしかなく。

「もう最後に別れてから、何百年経っているかわからないんですよ！？わかんなくなっただいいじゃないですか！？」

俺はその妖精が核爆弾の投下ほどの重要なことをいつていることを聞き逃した。

「と、りあえずここから出たいんだけど。自己紹介とかはでてからで。」

妖精の逆切れを流しながら妖精へと問う。

妖精は、「わかりました！」と元気良く返事をする。

……

「おい」

「や、やだなあ出る方法を忘れたわけじゃないですよ！？ちょっと

道のりがわかんないだけで…」

「それは、過去現在未来をさかのぼっても変わることなく、人々はそれを忘れたというのです。」

「なにそのスケールの大きいツツコミ!?!」

どうやらこの妖精は出方を忘れたらしい。

「まあとりあえず探索するか。」

緑の光で満たされたこの部屋をグルリと見回す。そうするとそこに杖が置いてあることを見つけそれを手にとってみる。

「暗くてどんな杖がよくわからない…」

手がかりかと思えば、暗闇で見えない、では違っのだろう。

「あの、ご主人様?」

「イリスだ。」

「はい?」

「俺の、名前。」

そう返答すると、嬉しそうにコクコクとうなづく。

「ここに契約は成立しました!」

——今何と言った？

「いや、しぶんの名前を与えるということは契約の証なので。」

……なんだか、もうどうでもよくなってきた。
とりあえずでなければじまらない、とにかく探索をしていく。

——十分後

「あとは…この魔方陣のみ。」

探索をして、ダンジョンによくある『なぜ置いてあるかさっぱりわからないつば』とか『誰が置いたんだよ、と思える宝箱』をみつけ、
はしゃいでいはしたが、肝心の出来たはわからない。

そうして魔方陣を触ると——発光が激しくなる。

「わっ」

「きゃあっ」

一瞬で光に包み込まれ——

——気がつけば公園にいた。

でれたことにアンドすると、妖精がいきなり声をあげる。なんだとみると妖精は納得気に

「ああっ思い出したッ！私と契約してから再度乗れば起動するんだ
！」

——妖精に殺意を持った。

宿屋に戻ると、とりあえず自己紹介をはじめ。

「さっきも言ったとおりイリスだ、よろしく。」

「私はたしか——ルビー、だったかな？」

「そうか、よろしくルビー、で妖精との契約といったけど、なにがあるの？」

「魔法の構築の補助、並びに独立した魔法構築による援護、そして話し相手です！あとは忘れました！」

なんだ、俺は寂しい人間とでも思われているのか？
魔法の構築と独立して魔法構築できる。

そのことに少々期待を寄せる。とくに独立のほう。
さっぱり魔法がわからないから、構築できるってことは魔法が使えるはず。

「なあ、まほ「あぁっ！」な、なんだよ。」

「魔法ってどうやってやるんですっけ」

テヘツ　みたいな感じで舌をだして頭をコツンと叩く妖精に、思わずひっつかんで窓から遠投してやるうかと思っただがなんとか抑える。

とりあえず、一冊本を取り出す。

「おそらくここにかいてある、俺も記憶喪失だ。いつしよにみるか。」

「はいッ！」

まったく、返事だけはいいいんだから。

【魔法】

『火、水、風、地、光、闇、時、空』

8つの聖堂があるように、魔法は8つの属性をもつ。

この魔法を扱うには、使える属性であることと、そして構築式を理解していることが必要。

時、空以外の6種は、空間に存在する精霊に干渉し、魔力を糧に力を貸してもらうことから発生することができる。

故に、使えるものはほとんど均等に存在する。

だが、時、空の二種は、神に干渉するといわれ、莫大な魔力を使用し、それ故に使えるものは極端に少ない。

魔法構築式とは、魔法陣のようなものであり、頭の中で浮かび上がらせ、空間に『在る』と想像し、魔力をもって形作ることにより完成し、それにより効果を発動させる。

構築式は、全部の種類で『囲い』の中で構築する。

火は正三角形

水は丸

土は正四角形

風はだ円

光はひし形

闇は長方形

時は二重丸

空は台形

となる。

そしてキーワードがあり、それは魔力の代償により魔法を使わせる精霊への『命令』である。

指をさし、当たれ、でもいいが、その外に『焼き尽くせ』『吹き飛ばせ』『破壊し尽くせ』などの命令が可能だ。

ルビーが肩に乗っかりながら、時節「そういえばそうだった。」などとうなずく、一方俺は理解はできるのだが、魔法構築式にたいする理解というものにとってもなく怖くなってきていた。

魔法構築式って、あれだ。

漫画で出てくるものだ。

『カー。キャプター』を思い出す。

言っておくが、さゆりの持っていた漫画であり自身のものではない。

次のページを見ると、構築式が所狭しと載っている。

目が痛くなるほどに書いてあるその構築式をみながら、なんとか理解できないかと思いじっと見つめるが、理解できたら苦労しない。

「あの、イリス様？」

「な、なんだ……」

「これは魔法構築式を覚えてれば使えるんですよ？」

……では理解ってなんなんだ？

「理解というのは魔法を構築するために必要なものという意味なんです。精霊と魔力、そして魔法構築式を知り、その使用を理解し、そして利用する。理解というものは感覚でいいのです。」

「ナ、ナイス、ルビー」

そういうと、えへへと笑いながら嬉しそうに笑うルビー。

とりあえずページのひとつの魔法構築式を見て、うる覚えながらも構築を想像――

「――！？」

とてつもない速度で構築式があみだされていき、構築完了。
うる覚えだと言つのに細部まで完全再現されている。

――体が、覚えている。

戦い方、そして判断力、そして魔法構築、これらを人が変わったと言つのに覚えている。

この体の元の主はなにものだったのだろうか。
どれだけの戦闘経験をしてきたのだろうか。

ルビーの必死になって本を見ている横顔をみながら。

「――とりあえず、生きることから考えよう……」

そつぽつりと漏らし、目をつぶってベットへとカラダを預けた。

第三話目『妖精と魔法』（後書き）

ギャグ要員一名追加。

やっときた——！

淡々と続いていきなんのイベントも主人公が慌てているだけで何も起こらないからさっさと進んで欲しかった！

第四話目『魔法学院』（前書き）

勇者、伝説、妖精、魔法、異世界、憑依、色々という意味が不明だ。

だけど、これはきつと希望なのだろう。

生きて帰る手だて、肉体をそのままもっていつて、さゆりに言えば信じてくれるかもしれない。

だけど、それでいいのか？

この体は別の人のもの、俺がそこに存在しているのだから理由があるはず。

それをみつけないければ、帰れない。

みつけてもかえれないかもしれない。

それでも、俺は——奇跡に頼るしかない。

もう一度あって、あの箱と、俺の言葉をプレゼントするために。

第四話目『魔法学院』

魔法、そういったものの存在を理解し、展開することもできる。
体が覚えているからだ。

だが——知識がない。

どうすれば、いい？

魔法をいざというとき展開しても知識なければ自殺行為かもしれない。

そういった恐怖というものがある。

さて、どうする？

「魔法学院か。」

「魔法学院ですか？」

俺がボソリと言い放った言葉を、ルビーが聞き返してくる。

「ああ、そういうものがこの国にはあるらしいんだ。」

おそらく城のような場所がそうなのだろう。ここは記念都市のうえ
中立国家だから王という存在はいない。三つの国によって中立的に
会議をなされ、ここの国は決まっている。

それゆえにこの国には知識が集まりやすい、ならば集まる場所には
いるべきだろう。

ここの魔法学院は王族もはいるし、平民という部類も入れる。
そのうえにこの世界に戸籍というものは意味はなく、たぶんだが入
れるのではないかと考えてみる。

——ファイに質問してくるか。

知らなければ聞けばいい。十分に考えた。

「よつ、と。」

ベッドの弾力を反動にして、後ろに力をかけた後立ち上がる。置い
てある荷物は全部もって、歩きだす。チャックアウトをすませ、門
番だから門らへんにいるだろうか？なんて思いながら外にでると、
学生のような格好をした人たちがいた。

「——魔法学院生徒ってところか。」

黒が主で、銀と黄色の装飾を施してある上着。内部にはYシャツと
赤いネクタイをしている。

女学生と、男子学生、それは三名ずつ。雰囲気はカップルというか
仲のよい友達といった感じ。

『ああああのさあ！あ、あそこのレストランで——』

前言撤回、ひとり、とある女生徒にとてつもなく惚れているようなやつがいる。

顔を真っ赤にして声をかけていて、もういっぽうの二名の男子生徒は苦笑いをしている。

微笑ましい光景だ。学生に話を聞いてもいいが、邪魔しては悪い。すぐに視線を外し、ファイに会いにいこうと歩きだす。

「イリス様？聞かないんですかあ？」

「邪魔しちゃわるいだろ、微笑ましいじゃないか。」

「でも——あの人たち嫌な予感がするんです。」

「嫌な予感？」

「はい——いえ、きのせいかもしれません。」

野生の勘みたいなものだろうか、ルビーからは野生というワイルドさなんて微塵も感じられないが、今は聞きに行ったほうがいいかもしれない。

危ない目にあつてたら助けよう。

いや、あの男子生徒が活躍して気を引けるかもしれない。がんばれよ！

ダメだったら助けるだけだ。ま、俺がいて大丈夫かなんてわからないけど。

俺はファイのいるであろう門へむかつてあるきだした。

――門前

「へえ、魔法学院か、イリスのレベルじゃ足りないんじゃないか？」

「知識が必要なんだ。」

やはり門前にいたファイは、買ってきた菓子を受け取るとボリボリと食い始める。

その容赦の無さには驚くばかりだ。どんどんと菓子が消える。――まあいいけど、菓子は食べるものだ。

「ふーん、試験申込の日はいまでも可能だよ。試験日は一週間後だけれどね。名前と金で十分らしいよ、どっかの王子様とかが偽名使ってはいってこられるようにだって。」

「――あれ、結構近いんだな？」

「魔法学、歴史、数学、理学、魔法薬学、昔は入学に憧れたからね。」

「生徒だったのか？」

「懂れた、だよ？入れてないよ、お金が足りない。」

「うあつ、お金の問題があつた！」

「ハハハ、君の腕前なら稼げるんじゃないかな？入学金80万、一年で40万の授業料。試験費用は2万だったかな」

俺の生きてた世界の大学ぐらいなものじゃないか？それは。

そう簡単にできるものが、Aランクで20万だったんだよな？Aランクなんて早々でるわけないし。
じゃあどうしようか。

「それで、何年で卒業？」

「4年、そのうえに3年の学習が可能だね。その上の3年をとつたら、自分のとつた専門学科というものがあつて、そういう役職になれる。」

うん、それなんて大学？

「 $80 + 40 \times 4 = 240$ 、なんてこつたい。」

「うお、そう聞くとAランクの化物12体分つてことになるわけだな...。」

ハア、とふたりしてため息をつく。

「ま、とりあえず考えておくよ。」

「おう、がんばれよ。」

そういつて俺は歩きだす。

街へと戻ると、なにか騒がしいことに気づいた。

「イリス様、なにか騒がしいですね。」

「そうだな、とりあえずいつてみるか。」

野生の勘と言うものが当たったといえいいのだろうか。

黒い顔の隠れた鎧をかぶった人たちに、案の定囲まれている魔法学院生徒。

なんだあれば、新興宗教とかそういうものだろうか。

「なんなんだよ、オマエリア！」

男子生徒のひとりが叫ぶ、先ほどの微笑ましい光景をつくりだした男子生徒は——気絶している。

ゲットアップハーリー！

『我らは魔王様の配下。』

『我らは魔王様のために動く』

『我らは魔王様をあがめたてまつる。』

『魔王ができれば勇者がでるだろう、光と闇、それがあるのが当たり前。』

『ならば学院の連中を皆殺しにするだけだ、勇者のでる可能性がある学院を』

『そう、これは余興』

魔王、魔王、魔王、やはり宗教にしかみえない。それも狂信者だ。嫌な予感しかない、ルビーもそのように顔をシカめている。

「魔王…魔王、魔王…」

なんどもその言葉を繰り返す、記憶になにか手がかりが——グッ！？

■——！お前は許さない！絶対にだ！』

『こい！ ■ ■ よ、アアやってみるおおおおお』

「ガッ——ふう、はぁ——」

息を整える、一瞬のことだったのだろっ、目の前の光景はいつさい変化しなかった。

魔王の配下とやらは、ナイフをもって女生徒の首につきつけている。

足は震えていない。いつでも飛び出せるだろっ、だが——人質がいる。

どうすればいい？

どうすれば——。

そう考えていると、肩になにかが当たっていることに気づく。

見てみると、いい笑顔をした妖精、ルビーがいた。

その笑顔の意味を理解して、俺も笑う。

「じゃ、いつてきます。」

そう告げたルビーは上へと登っていき、ちょうど人質の上に登ったところで、急降下した。

「凍れ、砕けろ」

一気に二つの魔方陣を構成した。水と風のコンビネーション。

ナイフを完全に凍らせたかと思うと、風を操り凍ったナイフをバラにする。

俺は瞬時に近づくと、人質をとっていたやつ顔面を思い切り殴りつける。

「絶ッ！」

「ギャッ」

短い叫び声をあげて、吹き飛ばされるやつをみながら、人質を後ろへと押す。

そのまま剣を引き抜くと、かかってくる黒い鎧たちを一瞥する。魔法は未だ心もとない、だがやるべき理由はある。

「吹き飛ばせ。」

二名を指し、示す。

構成完了は一秒もかからない。

黒い鎧連中は吹き飛ばされ、近くにあった店の壁へと叩きつけられうめき声をあげる。

黒い鎧連中は吹き飛ばされても起き上がり、剣を引き抜きかかってくる。

一撃をはじき飛ばし、風の魔法を構成、そして剣をもっていないほうの腕にまわせ、叩きつける。

「ガアアッ！」

風をもって、小さな竜巻、それでもそれは最強の一撃である力を直撃させられ、回転しながら吹き飛んでいく。

二人目の攻撃を回転しながらよけ、遠心力をもって加速し剣を思い切り叩きつける。

二人目も動かない、完了。

三人目は魔法を構成していた。

ここまで8秒はかかっているだろうに、まだ完成しない、それほど強い魔法なのかもしれない。

知らずのうちに冷や汗が流れる。

8秒もかけているんだ、構成はもうすぐ終わるだろう。魔法を構成し吹き飛ばすか？

そう考えてみると、頭上から隕石のような赤い塊が降ってきた。

そして、構成している奴は構成を終え、上に気づき発射。だが発生した竜巻は瞬時に消え、炎のカタマリに内消された。

そして直撃。

黒い鎧の連中はみんなのみこまれ吹き飛んでいく。

そして、戦いは終結。

ゆっくりとその場にたっていると、ルビーがやってきたのでハイタッチしておく。

魔法学院生徒は呆然としている。

周りからは歓声が巻きおこる。

ちよつと照れくさかったので、すぐにでていこうとすると、こちらをよぶ声がある。

後ろをみてみると、さっき捕まっていた女子生徒だった。つまりはあの微笑ましい空気をだしていた男子の好きな人。

「助けてくれてありがとうございます。」

凜とした声で言い放つその女性をじつとみつめ、コクンとうなづく。凜とした雰囲気の上、魔法学院の生徒——なんだかえらい人かもしれないために、あまり近付きたくない。

偉い人のうえ、王様や貴族がいる中世ヨーロッパを考えてみると、自分視点にいくと無礼者―ザク―ツって感じた。なにか無礼なことをやったらさくつと刺される。

「どういたしまして、で「まってください」…はい。」

いつでも無礼者―

関わってしまったら無礼者―

そんな情景が頭に浮かぶ。

「なにかお礼をしたいのですが…申し送れました、私の名前はセラミアと申します。」

「イ、イリスといいます。」

「イリス様ですね。」

イリス、様…だと…？

なんだこの怖い感じは、なんか怖い！

偉い人に様付けってとてつもなく怖い！

「なにかお礼を——」

「要りません、俺が勝手にやったことですから、…ではッ！」

全力逃走、関わったら『無礼者！ズバアッ』って切り裂かれる光景が頭のなかに何回も再生されているために恐怖心からくるものだ。颯爽とかけていく、ルビーが「まってイリス様アア」と追いかけてくるのを背後に聴きながら俺は全力逃走を開始した。

—side セレミア

彼が颯爽と走っていき、それをずっとみてしまう。

風と共に現れ、風のように去っていく、そんな彼の去った方向をじっとみつめながら、人ごみの中から声がするのでそちらをみる。

中年の門番が現れた。

「イリス？あれ、こっちに向かったと思うんだけどな——ってセレミア様！？」

「あら、どうかしましたか？イリス様とお知り合いで？」

「イリス様ア！？いやえっと、あいつのために申込書を——あっ」

門番から瞬時に奪い取る。自分でも驚きの速さ。

「どれどれ…まあ私のお爺様が長をしているところじゃありませんか。」

「あ、そ、そうですね。」

「まあまあなんてこと、これは運命というものでしょうか。」

クルクルと回りながらその申込書をもって演技がかっている言葉を言い放つ。

門番の顔がひきつっていたがなにもみていないことにした。

- s i d e e n d

- s i d e 主人公

その後宿の部屋にファイが申込書をもってきてくれた。
すげえいいやつ。

でも、わたしたした後、肩を叩かれたのでみると、ものすごい哀れみの視線を向けられ。

「がんばれよ。」

と言われた。

なんだったんだ？

ルビーがいきなり立ち上がったかと思うと

「嫌な予感がします」

そう言い放ったおかげで申込書を書きたくなかった。だが、とりあえず書いて出してみると、受付の人が

「おおおおおおお金をいたくなんてめめめめっそうもありませえええん！」

その言葉をカミカミになりながら叫んで受け取って奥にひっこんでいった。

なん…だ…たん…だ…

第四話目『魔法学院』（後書き）

僕 俺

気づいた人もいるかもしれませんが、気持ちの変化を感じさせるため——したかったんですが…うん誤字っばい

第五話目『全て遠き理想郷（安全面的な意味で）（前書き）』

——視線を、感じる。

その視線がなにものかはわからない。でも、その視線は熱いものだ。それを俺は感じ取り、振り向く。誰もいない。

あきらめては、ダメだ。

恐怖に震える足の一步、そう、ただの一步だ。

だがその一步は勇気をたくさん使う。

だけど、ここで立ち止まって意味があるのだろうか？いや——ない。諦めるな、とぎれるな、ただ、踏み出せ。

心はまっすぐ前に

歩き出せ。

第五話目『全て遠き理想郷（安全面的な意味で）』

「最近寒気を感じる。」

「そうか、それはご愁傷さまだ。」

試験前日、ファイにそう話すと手を合わされて南無、といった感じでそう言われた。

——この世界の宗教は仏教に近いのだろうか。

まあそんなことはどうでもいい。

最近試験前の勉強をしていると、背後から視線を感じ、その視線が、なんだろう、ぬめつとしているのだ。まな暖かい感じで、その生暖かさが異常に気持ち悪い。

なにが起こっているのかわからない俺はとにかく後ろを振り向いた
何も無いことをホツとし、ルビーが散歩から帰ってくるのを待つばかりなのだ。

ルビーがいれば視線はなくなるわけで、それは背後に誰かいるのを完全に悟らせるものだ、俺はまだ気づいてなかった。

「試験か——自信がない。」

そつポツリともらすと、ファイは苦笑する。

「森の奥深くにいたんだっけ？ま、そりゃそうだろうな。一週間で合格したら異常だよ。」

森の奥深くという説明をしたので、ファイはそれを信じている。まあ、常識がなくてもそれでごまかせるからそういう説明をしたのだからしかたがない。

いつかこいつに話せることがあるかな、俺の秘密。

俺は『転生or憑依』というカテゴリにはいると思う。

憑依といっても転生といえるのだろうが、厳密に言えば憑依なのだろう。

俺は死んだ＝転生

死んだかどうか不明、だけど俺は別人になっている＝憑依

そんなものかな。

死んだことも不明、だが死んだという記憶はある。

あのブラックアウトはなんだったんだろうか。

植物状態で、これは夢、そう考えたこともあった。夢であれども痛みは再現できる。

ならば頬をひっぱるといった行為は無意味で、その事実を考えてみて、俺はハアとため息をつく。

「ん、どうしたんだ？」

おっと、少し思考に落ちていたらしい、ファイになんでもないと返すと、俺は立ち上がる。

「ファイ、ありがとな。」

「なんだ今更。」

中年と、少年と青年の境である俺の年齢で、ここまで友達のように話せるこの男性はすばらしい人だと思う。

「ファイにあつて、俺は一步を踏み出せることになった。俺の問題に蹴りがついたら高級料理をふるまつてやるよ。」

「くつくつく、それは楽しみにしてるよ。俺の妻もよぶことになるぜ？」

…え？

「お前、結婚してたのかよ！」

「ぷはははは！お前の問題にけりがついたら紹介してやるよ！美人だぜえ」

そうやってケタケタと笑うファイをみながら、こいつを選ぶなんていい目をしているなんて心の中で普通に考えないことを考えていると、気配を感じ取る。

「イリス様ア、剣の練習するんでしょう？」

近づいてくる赤髪の妖精、ルビー、それを聞いて俺は立ち上がる。

「なんでえ、お前剣術の練習してたのか？あんなに強いのに？」

「俺は肉体の経験からできるようになっているけど、心は弱いのだ。」

「だったら、俺が打ち合つてやろうか？」

「え？」

打ち合う、と言われて思わず意外そうな顔をしてファイをみた。ファイは不服そうな顔をした。

「おいおい、俺はこれでもBランクを倒せる程度の腕前ではあったんだぜ？」

「昔は学院に入りたくて金がなくて断念して、昔は剣術がすごかった…その答えは？」

「騎士団の試験にはいるほどの金がなかった。だから門番やっているんなこれが。腕前をもって騎士団の推薦をとるやつはいるんだけどな、そいつらは門番程度みやしねえ」

最悪だ…金ばかりの世の中最悪だ…

「破アッ」

ガキンツという金属音をたてて剣を打ち合う、といっても鉄製の刃を潰したものだ。

それでも当たれば痛いし、剣程度に重い。

ガインツギンツという金属音がさらに加速していく。

それに追いついていく。

一週間程度だが、目が慣れてきた。もともと慣れていたのだろうが、その目に思考がちゃんと追いつくようになっていく。

俺の戦い方というものは軸というものをつかってやる戦い方。

避けるのは回転、それもみきつて、それで回転しながらその遠心力を味方につけてふつとばす。

ちよつと違うかもしれないが、『FINAL FANTASY』のセフィロスみたいなものだろう。

あの人はなんであの長い刀であそこまでふつとばせるのだろう。

折れぬ曲がらぬそれでいて切れ味は最高峰のもの、それを日本刀というものは目指していたのだろうが…つと、あまり考えてもだめだ。

そうしているとファイがボスツと倒れ込む。

ぜえぜえと息を荒くしているところを見ると、疲れているようだ。

俺も汗がでてきている。

「くつはー、ブランクは隠せないな。」

そういつて手をひらひらさせるファイに、正直ブランクなんても微塵も感じなかったと思った。

隙あらば突っ込んでくる、ちよつと手の力をゆるめれば剣は吹っ飛ばされるほどの力。

ならばと隙をつくつて、その突っ込みを吹き飛ばすほどの力の準備

をすれば、その裏をかけられる。

やりにくい相手でありながら、こいつの剣術はやっていてすがすがしいもの。

「やっぱ強え、一撃も与えられなかったくせに俺は何撃もくらった。」

そういつて笑うそいつは、昔はどれだけ強かったのだろうか、なんて思った。

そして、こいつが騎士団というものに入れないことに、残念な気分になった。

「ふう、じゃ、これ以上疲れるとだめだし俺はいくな。」

そういつと、ファイは俺の小さく手をふって、疲れたような声で「ああ」と返した。

—— 次の日

万を超えるであろう試験者をみながら、前日に買った黒を強調した正装に身をつつみ、俺は試験会場へと到達した。

【魔法学】 倍率38・8倍（採用人数：140人）

【魔法薬学】 倍率 3.8・9 倍（採用人数：100人）

【魔法剣学】 倍率 4.0・1 倍（採用：80人）

【魔法科学】 倍率 3.1・2 倍（採用：60人）

【魔法歴史学】 倍率 3.4・2 倍（採用：40人）

どんな人数だよ。

ついでに学科は一年目終了時に決めるらしい。

採用人数 140 名

その人数に俺は驚きながら、倍率の高さに心はドキドキだ。さて、どうしようか。

ピラツと宿屋にいつまにか置いてあった受験票をみると、8 階の 821 号室と書かれており、受験番号は 408720 だ。

学部があり、俺はそれがさっぱりよくわからなくて適当にだした。たしか——魔法学というところだったか。

魔法を知りたいのでそのまま魔法とかかかっているものをとったのだが――。

なぜ、俺の教室には机が二つしかないのだろう。

倍率をみて、教室をみる。

——なんなのだこれは。

その机がぴったりとおさまり、受験番号は二つともある。

えつるういいーとの子供たちと薄汚い俺とはいっしょにいたくあるいませえんってか？

それだったらムカツク！と勝手に心の中で叫んでみると

ポンツと肩を叩くものがいた。

試験管か？と思い後ろをみると

「あ…セレミアさん。」

茫然としながらそういいはなつと、セレミアさんは嬉しそうに笑う。

どうしよう、寒気がする。

「で、なんでここに？」

「私も試験を受けにきましたの。」

「え、でも君、ここの生々、あ、時間ももうすぐですし座りましょう。」——え、あ、はい」

俺が瞬時にツッコもうとしたが、それはセレミアさんにさえぎられる。

なんだろう、逆らったら死ぬという生物的本能が判定を降している。

試験管がはいってくるのをみて、ちゃんと席にすわると。

セレミアさんが体を近づけてくるのを感じた。

椅子がちよつとずつ地面に擦れ、ガリガリという音をたててその音が拡大しているのを感じ、バツと横をみる。

——ドアップのセレミアさんがそこにいる。

「え、ちよつとちく」キミ、私語はつつしむように「あ、はい。いや、ちよつとちかすぎると思いま」キミ、私語はつつしむように「いや、でも「キミ！」わかりました。」

誰か注意しろよ！この光景に注意しろよ！お願いだから誰か注意してくれ！

必死になって横をみずにガリガリと答えをかき連ねる。結構簡単だ。ズンズン進んでいき、魔法知識による項目は終了。

時間は2時間を予定されており、トイレによる退出はいつでもよい

というもので、急がなくてもいい設定だ。

魔法知識の次は歴史について、それを書き連ねていく。

横のガリガリという音と腕になにかが触れる感触がしたが俺はなにも感じてないぞ！知らないッ！知らないよ！

歴史も終了し、次は基礎薬学に対しての問題だ。

それを書き続ける、なにか柔らかい——なにも知らないッ！

心の中で男性がサンバを踊っている光景をが再生される。——なぜだろうとても落ち着く。

「（誰か助けてエエエ！）」

この試験の間、試験管に目を合わせると、ものすごい気まずそうに目をそらされ続けた。

合格したら、魔法実習とかがあつて、この人が担当だったらとりあえずこの人に向けて魔法をぶっぱなそうと思った。

こうして俺の魔法学院入学試験は終了した。

口から魂がでているような気がしたと、ここで記しておこう。

この試験で合格すれば、魔法による実力審査だ——

——魔法学院教員側

今現在、丸漬けを行っている。こういうのは魔法でなんとかしてはいけない、生徒の努力を感じる場所なのだから。そうすると、ふと、イリスの名前で手が止まる。

〇、〇、〇——続けて言ってみる。

魔法学、そして歴史学、歴史は不得意のようだ。魔法に関しては全問正解という快挙を成し遂げている。

歴史学は勇者の物語は全問正解だが、その他は間違いがみられる。そして——魔法薬学、ここは点数の捕れる場所だ。

だがみたとき、私は驚愕した。

あったのは、古代の魔法薬学についてのものばかりなのだった。

どれだけ傾いた勉強をしていたのだろうと思う。

だが、古代のほうとてらしあわせると全問正解という快挙。

合格最低点数を大幅に超え、私はとりあえず点数を表に書いておいた。

——三日後 side主人公——

合格通知が着ていた。

いつのまにか宿に置いてあることから、これが普通なのかもしれないと思った。

ファイに伝えると、自分のことのように喜んだ。

実施試験は明日、ファイは「お前なら大丈夫だって！」と二カツと笑う。

俺はその笑顔に救われた。

―次の日―

試験会場はただっ体育館のような場所、万にも及んだ人数が、すでに数千へと変貌している。

半分以上落とされたか、なんて思いながら俺の名前を呼ばれるのをまった。

試験は個室だった。体育館の横にあった個室。たしか魔法に対して耐性をもつ魔法がかけられているとか。

大きな個室をもって、黒いマジックミラーが左右に貼られている場所。試験管が説明を始める。

試験管がマジックミラーの向こうにいるらしい。ルビーはそう聞いてガラスをずっと不思議そうにみつめていたが、俺は気にしないことにして、言われた通りにする。

「では、なんの魔法が得意ですか？」

そういわれて、迷わず火とおしえる。だいたい可能だが、得意なのは火。

といつても、魔法は一通り使ったときには、光がしつくりときたが、だが光に対しては異常なほど強くなってしまふ。

たぶん抑えきれないのだと思う。だから得意なのは火。

「では、打ちましよう。」

そういわれて、俺は魔法を構成しぶちかます。

吹っ飛ばした場所にはひびが入っているが、とくにそれ以上にひどくなっている場所はない。

耐性というものがなにかはわからないが、すごいものなんだな、と思つて試験管をみると、呆然とした後ハツとしてこちらをみてくる。

「はい、これで…試験は終了です。」

はやいな、なんて思ったが、さすがに俺は喜んだ。

なぜかさつきから寒気がするのだ。

俺は逃げるように退出すると、セレミアさんがにっこりと笑顔で待っていた。

心の中で悲鳴をあげたのはいうまでもないだろう。

第五話目『全て遠き理想郷（安全面的な意味で）（後書き）』

——無理やり終わらせようと急ピッチでかいたため、誤字がめだつ
かもしれません。教えてくれるとうれしいです。

第六話目『落とし穴（製作者：■■■■）何者かに塗りつぶされている』前編

どうしてこうなった！どうしてこうなった！

第六話目『落とし穴（製作者：■■■■）（何者かに塗りつぶされている）前編

合格通知が置いてあるのをみて、俺は柄にも無くはしゃいだことをここに記す。

だけどその瞬間寒気がしてバツと後ろを振り返ったこともここに記す。

ルビーとともに街へと豪勢にいこうと思った。

なに、金の問題というものがなくなったのだ。いつそんなものができたかはわからないが特待生制度というものだ。
ファイにそう話すと、いっしょになってはしゃぎ

「イリスのおごりだー！」と叫び始めたので、俺もノリにノって「イエーイー！」と叫んだ。

はしゃぎながら店にはいったら持つてる金ほとんど食われたのをここに記す。

そんなに食ってないはずなのにすごい金額を要求された。値段も見なかった為にはらうしかなかったけど。

だから——一ヶ月後の入学式までに、金を稼がなければいけない。というか宿代すらない。

だから今、俺はここにいる。

―魔獣対策部

土下座のような状態で俺はフィリーネさんに仕事をもらえないかと聞いている。

フィリーネさんは、隣にいる全部くっちゃまったファイをみて、ハアツとため息をついて、後の棚からバインダーを取り出しひとつの紙を俺に差し出す。

「これね。」

それをすぐりつくかのように手に取ると、依頼名をみる。

『依頼：護衛任務』

ファルディアスにくのですが、最近、途中にある街道で、魔物がみられています。誰か護衛を頼みます。

期間：1週間

達成金

3000000エリス

「高いッ！高いぞオッ！」

なんだこの異常なほど高い金額は！？どこぞのお金持ちで？

「うわっこりゃあ高いな、300万ってどんな金額だよ、ええっと
依頼主は——あれ？書いてない」

「え？あ、たしかに、これじゃあだれだかわからないな。」

「いや、そ、そもそもイリスはここにきたの最近なんだから名前わ
かってもしようがないじゃない」

それはそうなのだが、ムムム…嫌な予感しかしない。だが背に腹は
変えられないのだ。

——しかし、なぜか寒気がする。

「ち、違う依頼はないんですか？」

「ないわ。」

この即答について問いたい。

ファイが周りを見て、なにをいつているんだコイツ、みたいな目で

フリーネさんをみる。

「あのなあ、横にあるじゃな」ああっこれはもう依頼完了だったわ
！「…え？ちよ…」

横にあつた掲示板のようなものをいつきに片付け始めるフリーネ
さん。さらに嫌な予感がする。

「……どうするか。」

受ける 嫌な予感しかない
受けない 最悪野垂れ死に

受けるしか…ない…ッ！

「ハッハッハ…ハアッハアッハッハッ」

「お、おい大丈夫か？」

「いいだろう受けてやる！じっちゃんの名にかけて！」

「だ、大丈夫かイリスウツ！？」

そして半ば自棄糞に契約を交わした俺は、フリーネさんの安堵し
た表情と、ファイのとてつもなく心配する顔をみながら、俺は意気
揚々とするきはじめた。

3分で後悔した。

金魚がエサをもらうがごとく口をパクパクしてその光景をみる。
馬車、女性たち、馬車を操る人であろう男性。

そのなかのひとり——セレミアさん。

「(くぁ wse d r f t g y ふじこ ー p)」

何語を話しているのだから自分でもわからない言語を心の中で叫ぶ。

「だ、だいじょうぶですかイリス様ア!？」

俺の様子に心配したルビーが声をかけてきてハツとする。

「だ、大丈夫だルビー、ちょっと意識が天へ召されそうになったただけだ。」

「それ全く大丈夫じゃありませんから!？」

しかたがない、腹をくれ俺、と心で自分に言い聞かせる。もう依頼を受けてしまったし、契約もした。金額も金額だ、ここでいやがつてちゃ社会にでたときやつてけない。

社会人は忍耐力と許容力と適応力と理解力がタメされる者の…はず。これが社会人かときかれると疑問だが、気にしないことにする。

とりあえず馬車に近づこう。

「こんにちは、護衛のイリスです。」

「あぁっなんて偶然ッ!もう赤い糸でつながってるとしか考えられないわね!」

この人だんだん壊れてないか?

とりあえず依頼書をみる。

そして挙動不審なフリーネさんを思い出す。

不自然な値段の料理を思い出す。

…もしかして嵌められた?

そう気づいたときにはもう逃げられない位置にいた。

とりあえず馬車にいる人々に声をかけようと思い、セレミアさんに

促せるがままに馬車内部で一声かけることとする。内部には金髪で、漫画とかでしかみないようなツインロールをしているお嬢様ですと、いい気な少女と、双子の少女だった。

「あ、はじめまして、今回護衛を務めさせていただきます、イリスと申します。」

とりあえず挨拶をして、さっさと抜け出そうと思うと、ガツと腕をつかまれる。セレミアさんだった。

「いっしょにいたほうがなにかと護衛は簡単でしょう?。」

「し、しかし狭いと思います。見ての通り鎧装備ですし——」

「だったらイリス様が座った上に私が座ればいいんです。」

What!?

「なにか幻聴が聞こえた気がします。」

「あら、それは大変ですわ。」

「では、私は「ではおすわりになってください」…外に「では、よろしく願いますね」えっと…」

困った、困ったぞ、いたいセレミアさんに何が起こった！つとつかあのほのぼのとした空気を出していた男子生徒はどうした！（セレミアさんが3人ずつの男女で街に着ていた時にいた人）そう心の中で叫び続けても逃げられはしないとはわかってる。
さて、どうしたら――

「ちょっとセレミア！」

「…ナア…ミーナア…」

救世主は、金髪ツインロールだった。

ミーナというらしい、なんていいお嬢様なんだ。
というか怖ッ、セレミアさん怖ッ！

「平民と私をいっしょにさせる気！？」

うん、この一言で俺の中でのミーナ株というものが最低を記録した。
世界恐慌が巻き起こるんじゃないかってくらいになった。

「チツ…あら、ミーナ、これでもイリスさんは今年入学するクラスメイトですよ？今まさに仲良くする機会じゃない。」

「それでも「え！？そうなの！？」ちょっと！こえをさえぎらないで下さいません！？」

「そうなんですかあ…。」

おや、双子も会話にはいつてきた。そんなに俺が学校にはいることがおかしいのだろうか？

「おっと、自己紹介だね、私の名前はルナ、苗字とか家柄とかどうでもいいからルナって呼んでくれ！」

「苗字とか家柄とかどうでもいいって「アリス…」あ、アリスさんまで…」

ふむ、ルナとアリスか。呼び捨てでいいといってくることから気さくな女性だと思う。先ほどから言葉をさえぎらせ続けられて怒りがたまり始めているミーナさんを見て、ヤバイと少し思ったので、フオローしようと思った。

「ええっと、ミーナさん…」

「私の名前は、ミーナ・ファルクス・フォン・フラウデリカですわ！」

ミーナ・ファルクス・フォン・フラウデリカ、やばい、この世界の貴族の名前ってどう呼べばいいのかわからない。そもそも前の世界

でも知らない。

えっと、一番最後が苗字だったかな？

「で、ではミス・フラウデリカ」

「もういいですわ、ミーナで。」

「ひとりだけ苗字で呼ばれるのがさびしいですね。」

「うるさいですわッ！」

なんだろう、この個性あふれる少女たちは
だけど、わかった。この子たちはいい子なのだろう。

俺はゆっくりと息を吐き、吸う。

「では前のほうにいますね。」

「とりあえず座って下さい。」

逃げられなかった。

必死にお願いして、馬車の前の部分から話することに決定した。
はじめからそういつていればよかったんじゃないかと思って少し悲しくなったが、心の中で納めておく。

アリスがルビーを珍しそうにみていたので、ルビーに目を向けると、
コクリとうなづいてアリスのほうへと向かって言った。

楽しそうな声がしていて、少し嬉しい。

ルビーが中にいれば後ろからの襲撃にも気付けるし。

馬車はガタガタと揺れながら走っている。道は舗装されていなく、
たまにあるデコボコ道や、小石などで馬車が揺れる。

正直、はじめての馬車にはしゃいで俺はなにも感じてはいなかった。
た。

腰の痛みとか

「では、イリス様は森の奥深い場所からきたのですか？」

「ん、そうだね。」

「へえ、森の奥深い場所かあ……」

セレミアとルナが興味深そうに聞いてくるので、ごまかすための嘘を言う。自分でもわからないなんていったら警戒心が高くなりそうだし、異世界からきました、なんていったら問答無用で魔法をはなれるか、茫然とされるか、いたい子とみられるかだ。

「ふん、田舎者なんですのね。」

ミーナが憎まれ口を聞いてくるが、先ほどの会話を聞いてくると、思春期の妹にしかみえないために怒りとかイライラとかはない。

「たしかにそうだね。」

ニコニコとしながらそう返答すると、みんなが目を逸した。え？なにか悪いことをいっただろうか？

「でも、剣も魔法もすごかったです。」

「剣も魔法も、正直自分がどのくらいかわからないんだ。外界からの連絡手段はなかったし」

「魔法構成一秒以内、剣もAランクの魔獣とやり合えるって調べでありますわ。」

いつ調べたんだ。

「へえ、それってすごいとかそういうレベルじゃないような気がするんだけど？」

「た、たしかに…そうですね…」

若干引き気味のお嬢様方、何か変なのか？

「そうですよー、イリス様はすごいんです。」

そうルビーがくると回りながらいつてくる。いや、魔法とかお前のほうがすごいんだけど、…聞いてるとちよつと惨めになるくらいに。

そんな他愛のないことを話していると、本能が何かを感じ取り、いつでも迎撃できる体制をとって剣を引き抜く。

「な、なにかありましたか？」

俺の様子に馬車の手綱を握っている男性が聞いてくるが、俺は首を横に降った。

一連の動作は体が勝手に行ない、そのまま声をだす。

「視線はしたが、殺気というものではない。こちらをうかがってい

る状態だ。——いや殺気というよりも、意思が感じられない?」

何か、おかしい。けど何も起こらないまま、このまま馬車はファルディアスへと走った。

第六話目『落とし穴（製作者：■■■■）何者かに塗りつぶされている』前編

学院編始まって早々に学院から離れる事態。

次の次くらいに学院編本格的に始動——かもしれません。

ついでに、学院編ってまだ始動編みたいなものになります。

第七話目『落とし穴（私、みたんです、たしかセレミウわちよなにするやめ』後

ガタガタと揺れる馬車の中、袋に入れてある杖をみる。

それはルビーと出会った場所にあった杖。

白の中に、ルビーで装飾された杖。

そこから感じる魔力は強大なもの。

一体誰が使っていたのだろう。

——そしてルビーはなぜ、俺をご主人様と読んだのだろう。

謎は深まるばかりだった。

長くなりました、真面目にごめんなさい。

8315文字、こんなのみたことないwwww

第七話目『落とし穴（私、みたんです、たしかセレミウわちよなにするやめ』後

——ため息をつく。

お嬢様方は、ファルディアスに着くやいなや、待っていたボディーガードのような人に連れて行かれてしまった。

あとは帰りまで楽にしていいらしい。

セレミアさんは名残惜しいかのように俺をずっとみていたが、その視線に妙な寒気を感じたのでとりあえずゆっくりとできることに喜んだ。

「さて、どうしたものか。」

——大和武イリスの生存術——

- 1 ・面倒ごとに突っ込まない
- 2 ・権力者とはあまり関わらない
- 3 ・自立たない
- 4 ・無闇やたらに行動しない

その上で俺は変える方法を考えなければならぬ、結構キツイ気がするが、それを乗り越えるからこそ、俺は俺の望むことができるのだ。

人の夢とかいて夢いと読む。

だがその儚さも努力によって強いものへと変わっていく。
俺は頑張る。絶対に頑張る。

そっ心に決めて歩きだす。

——いい匂いがした。

「——飯だな。」

「そうですね。」

前払いでもらったお金をつかんで、俺たちは飯屋へと走っていった。

ふう、と店からでる。国の名産の食べ物ってあるかな？って思った
ら、メニューに名産品とかいてあって思わず頼んでみた。

レシエントが日本人の味覚にあっていたから大丈夫かと思えばそんな
ことはなかった。

初めて食べる味に戸惑いつつも、美味しかった。

そうして俺はどこにいつか考える。

たしか——聖堂があるとファイがいつていたはずだ。

水の聖堂

光の聖堂

空の聖堂——

——行くところもないし、いつてみようか。

——いや、なぜか行かなければいけないような気がする。

こういうときに限って、危険なんだよな。

ため息はついたが、ダラダラと過ごしても無意味。

だからとりあえず場所を聞いてみようと思い、立ち上がる。

——とりあえず誰かに——そう思い周りを見回すと、帽子を深くかぶった少女を見つけた。

大通りの中動かずに手に持ったお菓子のようなものをモフモフと食べている。

あの子なら聞きやすいな、そう思って俺は近づいてみる。

「すみません。」

「ひゃあっ!?!」

叫ばれた、ちよつと心にザックリと矢が突き刺さっていると、少女はその様子の俺をみてペコペコと謝ってきた。

「ご、ごめんなさい、いきなりで驚いてしまつて。」

そう謝る少女にパタパタと手を顔の前で左右に降つて、別にいいと言つと、安心したように息をはいた。
そのときだつた。

「ッ——！？」

殺氣が現れ、俺はとびのいた。巨大な黒い鎧を纏つた剣士がそこに存在し、立っていた所は大剣が突き刺さっている。

『魔王様のために——力があるものたちを——殺す、殺す、コロス——』

殺すと連呼し続けるでかい鎧をみて、寒気を感じた。
力あるもの？俺のことだろうか？

『セフィリアス、力あるもの——殺す』

セフィリアス？誰だ——それは？

「私の……先祖の名前です。」

——つまりッ！

こいつが狙われていたということか！それで俺が現れて！関係者かと思われ、そして俺が攻撃された！。

いや——黒い鎧を纏ったやつらを倒したことがあったな、もしかしてそれで俺も危険視されている？

だとしたら——ここは大通り人がたくさん居る、そしてあの太剣、降れば被害がでることは間違いない。

「っここは…逃げるッ！」

なんという自滅行為、生きることを考えるなどといって、自分ではいつていつて、そして巻き込まれている。

だが、目の前にいるのだから見捨てて自分のみ逃げるなんて行為は後味が悪すぎる。

少女を抱きかかえ、小さな悲鳴を少女があげるのを感じながら一気に飛ぶ。俺がいた場所を太剣が通り過ぎ、横にあった家の壁が崩壊する。——ごめんなさい

『——追えッ』

大きな鎧のやつ声が響きわたり、そこから人の形をした影が現れ追いかけてくる。二体——速いッ！

「吹き飛ばええっ！」

ルビーが魔法を構成し、影をいつきに吹き飛ばす。

「妖精さん…お強いんですね。」

「えへへ…」

「照れてる場合か！」

走りながら俺は少女とルビーの会話にツッコミをいれる。

「飛ばせ！」

俺は魔法を構成し、自分を上に吹き飛ばし、とある家の屋根へと降り立った。

そしていつきに風を後押しさせて、加速して走り出す。

「イリス様ア、次がきます——12体！」

「増やしてきやがった！」

ルビーが後ろをむいて情報を伝えると、影の数が増えていることを感じ、俺は悪態をついた。

疾走しながら周りを見回すと、裏通りに広い場所が見え、そこに風の魔法を構成し、吹っ飛んでいく。

「うおおああああっ」

正直この叫びはかつこ悪いと思うが、気にしないでおう。

ジェットコースターのような風圧と速さ、それから守るために少女を一生懸命に抱きとめ、ぐらつきながらも着地。

そして立ち上がり、少女を地面へと置くと、剣を引き抜く。

「もうすぐ、私の護衛のアーちゃんがくると思います！」

そういつて彼女が持っているのは石、——今は発行している。

たぶん居場所を知らせるためにあるものだろう。

黒い影が周りを囲み、黒い鎧の男が、突然下に黒い円が現れたかと思つと現れる。

『逃げられぬウ…』

「ルビー！」

「アイサアアツツ！撃ちぬけツ！」

ルビーが光の魔法を構成、そして何本もの光が影どもに打ちはなれていく。

12体の中、三体が吹き飛ばされ消えていく。

『足掻くな…屑がアア』

一体の影の突撃、それを剣で空中に吹き飛ばし、かかってくる奴らみる。

二体目を一体目の影を吹き飛ばしたとき降った剣の力を利用し、回転しながら遠心力で力を高め、切り裂く。

三体目は魔法を構成し、複数と共に、火球に巻き込まれ消えた。

『クハツクハハツ』

黒い鎧のやつが笑う、そうすると周りに影が現れる、その数36体。

「イリス様アツ！増えました！」

「わかってるツ！」

ジリ貧——そういった言葉しか考えられない頭にイラつく。
倒すためにはあの黒い鎧を倒さなければ、だが少女をまもるために、ここにいないければならない、どうすればいい…どうすれば。

考えても思いつかない、ルビーと守りにする？だがルビーは魔法のみしか使えない、たしかに構成は速いが小分けされて突っ込まれ続ければボロがでるだろう、どうすればいい、そう心の中で畜生と叫んだ——そのとき！

「エンゼロツテ様アア！」

「アーちゃんツ！」

仲間が現れた！アーちゃんと呼ばれた少女は影を二体ほど切り裂くとエンゼロツテと呼ばれた少女に近づく。

「ご無事でツ！」

「ええ、彼が助けてくれたので——」

そういつてエンゼロツテさんがこちらをみる。俺はかかってくる影を三体、いつきに切り裂くとルビーが魔法で風の刃を作り出し、数体を切り裂いていく。そしてそのままいった。

「すまないが、その人を守っててくれないか！」

「あとで礼を言う——守るのは当然のことだ、いわれるまでもない！」

その誇りの高い声をきいて、自然と安心できる。
俺は即座にとつげきを開始する。

かかってくる影をいつきに切り裂くと、地の魔法を構成する。

「撃ちぬけ！」

地面から弾丸のように土の弾丸は飛ばされ、何体もの影が打ち消される。

俺はそのまま飛んで、黒い鎧へと切り裂く。

『甘いッ！』

だが、大剣で防がれる——それは当然だ。
そんなものは分かりきっている！

風の魔法を構成、剣に風をのせ、そのままはじき飛ばされた反動を利用し、回転する。

そのまま、下段からの切り裂く。

『なッ——ガアッ！？』

「ハアッハアッハアッ……」

切り裂かれ、黒い鎧は後ろへと飛ぶ、そして切り裂かれた肩を触り、俺をみた。息が荒い、整えなければ。

そのとき異常な殺気を感じ取り、俺は後ろへと飛ぶ。

そのときだった——世界が白に染まったのは。

体が悲鳴をあげて、吹き飛ばされた。

だが地に足をつけて、倒れないようにし、白の世界から戻った景色を見る。

「いない…」

すでにその黒い鎧はいなかった。

「魔力の暴発を利用したのですね。」

「暴発？」

「魔力というものは水風船の中に入っている水と違ってください、それを一時的に破壊し、すぐに生成すると、命に別状はなくなりません。——そう簡単にできるものでもないですし、並大抵の人なら一瞬で死にます」

「それだけでも、あいつの力というものがわかる…か。」

そういうとルビーはコクリとうなづいた。

ふう、と息をはいて後ろをみると、エンゼロツテさんとアーちゃんと言われた人がいた。

「この度は何度礼をいっても足りないほどだ。私はアーティ・ランゼリア、エンゼロツテ様の護衛をしている。」

「あ、イリスです。…いえ、いいですよ、お礼なんて。」

「でも、お礼がしたいです、家に来て下さいますか？」

——嫌な予感がする。いまのところ嫌な予感は百発百中…さて、逃

げるか。

「いえいえいいんですよ、お気持ちだけで、有難う御座います。謹んでお断り申し上げます。」

「——エンゼロツテ様の願いを断るのか？」

「へ？」

クワツとアーティさんが口をあける。覇気みたいなのがみえるんだけど。

「エンゼロツテ様のこの心優しきお願いを断るとは何事か！このアーティ・ランゼリア、エンゼロツテ様に魂を捧げた身！エンゼロツテ様の心優しき言葉を無下にしようとは言語道断！そのような無礼者、エンゼロツテ様のいのちの恩人なれども許してはおけぬ！剣を抜けエエ！」

「なにいつてんの！？」

「こないか！こないならこちらから——「アーちゃんツ！」…はい。」

アーティさんがテンションをあげて襲いかかるうとするが、エンゼロツテの言葉により鎮静化する。

「なにか用事があるのですか？」

「あ——えっとお、聖堂のほうにいこうかと。」

「まあ、ここからなら——水の聖堂のほうですね。」

「え、あ、はい。」

「今日中にいけるではありませんか、アーちゃん、いっしょにいつでもいいかしら？」

「い、いけませんッ！エンゼロツテ様は先ほど襲われた身、また襲われでもしたら「ダメ？」うぐうつ…」

エンゼロツテさんの涙目、上目遣いコンボにアーティに　こうかは　ばつぐん　だ　！　な、状態。

「本当にすぐにいったらばつぱと帰りますからね！」

「ありがとう、アーちゃん！」

あーあ、抱きついちゃってまあ…。

アーティさんは顔を真っ赤にしている。

ニヤニヤとして見ていればたぶん「何をニヤニヤしてるか！」といつて剣で襲われそうだからポーカーフェイスを頑張る。

「さあ、いきましよう。…聞きますが——その妖精さんのお名前は？」

「あ、私？ルビーっていうの、よろしくね！」

「はい、よろしく願います。ルビーさん。」

「ほう、妖精族か…珍しい。」

アーティさんがそうつぶやくと、ルビーは不思議そうに首をかしげる。

「めずらしい？」

「知らないのか？妖精族はほぼ絶滅間近だということを。」

「ええっ！？」

ルビーは驚愕していた。

「ええっ、えっと、みんな、みんな死んじゃったの！？」

そう泣きそうになって言うルビーの頭にポンツと手をのせる。

「機会があつたら探そうな。」

「イ、イリス様ア…あゝりがどうござびます…」

泣きそうな、というか泣きながら俺にお礼をいうルビーに、ほほえみながら俺は歩きだす。

「？、どうかしましたか、エンゼロットさん、アーティさん。」

目の前をみると、エンゼロットさんとアーティさんが口をあけて俺をみている。

「い、いえ、相性がいいなあ…と思ひまして。」

「あ、ああそうですね。」

そういつてカツカツと足をはやめて走っていった。

「え、ちょ！？速い！？」

「ああつまつてイリス様ア！」

そして俺達は水の聖堂へと向かった。

――水の聖堂――

歩き出し、20分程度で到着する。街の大通りを進んで、階段が二つあり、その左へといくとあった。

ジャバジャバという水の音、噴水が水を吹出し、階段の横に水路があり水がながれている。

「――水の聖堂に名を恥じぬ美しさ。」

「そうですねーイリス様あー」

「さて、中を軽くみたらぱと、ですよ。」

そういうアーティさんにコクリとつながる。

そして、聖堂内部へとはいった。

神官が、エンゼロットさんをみて、驚いている。

「え、エンゼロット様、今日はどついうご要件で？」

神官のひとりが聞くと、俺のほうに手をやる。

「こちらの方に助けられたので、御礼を兼ねて……」

「あ、そうなのですか、水の神の像は見ていきますか？」

「はい、お願いします。」

そういつて神官は走って内部へと走っていく。そして数分後に別の神官が現れ、「こちらです」と誘導しはじめ、いくと広間へとおされる。

——教会のミサをやるような場所だ。

水の神の像は、美しい女性の像だった。

それに俺はゆっくりと近づく。

——俺は彼女を知っている？

「どうしたのですか、イリス様？」

「――」

手を像へと、伸ばした――

熱い、熱い、熱い――

紋章のある胸の部分が熱い。

これはなんだ。

これは――共鳴？

目を開けると、白い世界にいた。

その世界は、みずに満ち溢れた…神殿のような場所。

そこにいたのは一人の女性。

――キミは、誰？

『ああ…会いたかった…』

そういつた声がして、俺は彼女がわからないことに、とてつもない
悲しみを覚えた。

『——あなたは、彼ではない、でも彼……。——ああ——あなたは最
後までこの世界を救いたいのですか』

なにをいつているのかわからない。でも、俺のことだとわかる。
彼ではない、そりゃそうだ。

でも彼だといわれるとわからない。
そして世界を救うだと？俺は何者なんだ。

『あなたは大きな運命に巻き込まれるでしょう。でも、それを持ち
越えればあなたの願いは叶う』

——叶う？

『ええ——、これを。』

そういつて渡されたのは、宝玉。

——これはなに？

そう問うと、その宝玉は——剣へと入っていった。

『これはあなたの剣を真なる姿へと変えるもの。』

——剣を？

『あなたがあなたの願いを追い求めるなら——宝玉を、宝玉は9つ。
』

——聖堂で貰えるとしたら8つのはず。

『宝玉は8つの力と1つの、とある感情からなるもの——もう、時間ですね。』

まってくれ、まってくれと叫ぶが、声はとどかない。
そのまま意識は薄れていく——

「……い、お……！」

「ハッ!？」

「おい!大丈夫か!」

「ど、どうしたんですかイリス様!？」

「大丈夫ですか!」

目をあけると、俺を心配そうにみつめる3人。
フラフラとしながら足場をしっかりとらせて、俺は剣を触る。
少し抜くと、剣は青い光を纏っていた。

「これは…どうしたんだ？」

アーティさんが聞いてくる。俺はゆっくりと目をつぶり、開ける。

「女神様にもらった。」

「女神——あぐうつ…くつ…」

俺が女神というと、ルビーが頭を抱える。

「大丈夫か！？」

俺がふらふらと落ちて行くルビーを手に乗せると、ルビーは俺をみた。

「カトルイス様？」

そういつてルビーは意識を無くし、そのまま倒れ込む。

——カトルイス？

それは、誰だ？

そんなことを考えている場合ではない、さっさとルビーを安静に——

「私の家が、近くにありますが！そこで——」

「ああっ、恩に着る！」

そういつて俺達は走り出す。

十分後にいたのは城の中だった。

「……え？」

ルビーを看病しながら、やっと我にかえったときにみたのは
送り届けたセラミアさんたちとエンゼロッテたち。

「えー？」

「おおっエンゼロツテエ！我が娘よおっ！襲われたと聞いたぞ！傷はないか！？」

「大丈夫ですわ、お父様！彼が助けてくれたので！」

「おおっ、ありがとう少年、名はなんという？」

「い、イリスデス、イリス・ルヴェル。」

「おお、イリスよ、礼ならなんでもしてやろう、何でも言ってくれ！」

「イ、イヤ、ルビーヲタスケテイタダイタケデモ」

「なんて健気な少年なんだああ！」

なんだこれ。

そう心の中でポツリとつぶやく。

この状態をなんて呼べばいいのかわからない。

「泣き面に蜂？」

ポツリとつぶやいた俺に、。も×もつけてくれる人はいない。

ルビーが起きたのは三日後だった。

三日間となりにセレミアさんがいて、心の中がとてつもなく穏やかじゃなかったことをここに記す。みんなルビーを見舞いに来てくれたので、優しい子たちなんだな、と再認識した。

そして、三日後ルビーにあの時行った名前をいっても、わからないという返答しか帰って来ない。

カトルイス、俺の体の元の持ち主なのだろうか。

そしてあの水の女神について考えてみたが、なにもわからない。

そして数日がすぎ、帰る日になる。

セレミアさんもミーナさんも、ルナさんもアリスさんも、エンゼロツテさん、いってしまえばお姫様の友達だったのだ。つまりはそれなりの階級。

それでお呼ばれして来たらしい。

俺はルビーが起きた後の、数日の間、兵士に紛れ訓練をさせてもらったなどとしていたので有意義だった。

ルビーは王様に妖精族についての情報をお願いしていた。

快く引き受けてくれたところを見ると、やさしい人なんだなと思う。

帰る日、エンゼロツテさんに「また会いましょう。」と言うと、「すぐに会えますよ」という返答がかえってくる。

そのことに不思議に思いながらも、俺は馬車にのりこみ、走り出し

た。

「ふう、まさか行ってみていないとおもったらイリスに助けられてたとわね。」

ルナさんが馬車が走り出した時にいった。

「はい、驚きました。聖堂にいこうと思って道を聞こうと思ったらまさか姫だなんて。」

「まったく、オーラで気づきなさいよ。」

「ミーナ、それ、無理難題。」

ミーナさんの言葉にアリスさんのツツコミ。俺が見えないようになづいていて、それにミーナさんが気づき、「なにうなづいてますの!？」と怒り始める。

「まあまあミーナ、落ち着いて。」

それをたしなめるセラミアさん、全く常識人なのか違うのかわからない。

平和でほのぼのとした会話をしていると、アリスの肩の上にいたルビーがバツと顔を俺にむける。

俺は瞬時に後ろをみると、気配を感じた。

「くるッ！」

「きますッ！迎撃を！」

できたのは——大量の魔物。

それも、すべてが屈強そうなやつらばかり。

「——多いッ！」

「弾け飛べ！」

ルビーの瞬時の魔法行使、それにより目の前にいる魔物が吹き飛ばす。俺は剣をふり、魔物をいつきに5体を葬り去る。

数の暴力、それが完璧に当てはまる展開。そしてそれら魔物の目には光がない。

「——操られている！？」

故に、理解した。魔物の思考回路は人間より劣るところや、巨大な魔法による威嚇は無意味だと。

いきなりの最悪の展開…

そして、囲まれているのを理解すると冷や汗がながれる。

「吹き飛ばせ！」

巨大な魔法行使により竜巻を精製——大量に吹き飛ばすが、敵は増えていく。

「なんなんですか、これは…この展開——知ってる…!？」

「知っている!？、…集まれ、薙ぎ払えッ！」

大きな炎を手に収束——そしてそれをムチのように振るい、薙ぎ払う。

——キツイとか、そういうレベルじゃない。
気を抜けば誰かが死ぬ。

「ちょっと、大丈夫ですよ!？」

「加勢いたしましょうか？」

セレミアさんとミリアさんがでてるが、それをルナがおし止める。

「いま加勢しても——足でまといだ。」

「クツ…このミーナ・ファルクス・フォン・フラウデリカが、足でまといなどと——キャアッ」

「死んでしまつたらそれで終わりなんです！だから今は馬車にいてください！」

ミーナにとびかかってきた魔物を切り裂く。俺は——どうすればいい？

ルビーを見ると、思い出そうと必死になっている。

「ガッ——！？」

横からの攻撃、ミノタウロスのような巨大な魔獣の攻撃により吹き飛ばされたのだと理解したときには意識が消えていた。

『——節約、したいんだけどな』

誰かの声が、した。

—三人称—

誰もが、絶望的だと思った、そのときだった。

吹き飛ばされた痛みなど感じないようにイリスが立ち上がるのをみた。

目を細め、イリスはゆっくりと歩きだす。

「ルビー」

「え、あ、イリ、ス…さ…ま？」

なぜルビーが疑問をもって彼の呼ぶのか、それは呼んだ本人すらわからない。

「教えてやる…それよりも、『俺というものはあまり生きてられない』だから、お前におしえる。『コイツ』の意識はあるが——お前がちゃんと教えろ」

「え——？」

そういつて袋から杖をとりだす。

「こい」

そう彼がいうと、ルビーは杖へと溶け込んでいく。

そして彼は剣と杖を重ね合わせると、杖は剣と一っしょになる。

「共鳴せよ。」

ただ一言で、体の紋章と、剣が共鳴する——！

「だれだかしらんが、俺の愛するやつ……何代目かは知らないが——
—そいつらの安全を脅かすなら、容赦はしないッ！水神の剣よッ吹き飛ばせッ！」

イリス、いや正確に言えばイリスではないが、カラダをつかっているのはだれだかなんて誰もわかっていない
—だか、小さな、気絶寸前でしかないイリスの意識の中、イリスは、水圧でぶった斬るやつってあったよな、などと他愛の無いことを考えていた。

「去れ」

その瞬間——彼が剣を横に振った瞬間——
この場にいる魔物がすべて、その剣の『一撃』で吹き飛んだ——

そしてそのまま、イリスは倒れ込む。いつの間にか杖から復活したルビーと、剣と杖がそこにあった——。

第七話目『落とし穴（私、みたんです、たしかセレミウわちよなにするやめ』後

魔法力比較すると

イリスがメダロット3のロクシヨウで

ルビーがメダロット2のゴッドエンペラーになる（意味不明

ついでに、メダロットシリーズの記憶が完全に薄れているために――

――あてにならない（ならなぜいった

ついでに他の人たちは

ヘベレケ博士が使ってた機体の足がない状態…かなあ？

第八話目『二度目の青春？そんなものはない！』（前書き）

奴隷制

平民と貴族による階級差

実力者社会

プライドによる過ち

この世界観は、上のものはたしかにあります。

途中でこれを題材にします。

貴族のプライド、というものがあるので、主人公は時々殺されそうになるくらいの描写は確実にあるんじゃないですか？

いや、これよくあるRPG設定だけどね？

しかも姫とか貴族に主人公好かれてるけどね？

主人公もげろとか思ってくれと幸です、とりあえずそれにハイタツチで答えますから。

第八話目『二度目の青春？そんなものはない！』

さて、みなさん考えてみよう。

題材は『異世界トリップ』

そう今更なものだが、考えてみる。

俺はまだ大丈夫なほうだ、力もある、憑依だから、だけれども。

体はたしかについていつてるが、いまだ心は慣れない、無理やり心を奮い立たせて剣を振るい続けるものだ。

正直申し訳なくもある。

ファイの努力を馬鹿にしているようにみえて。

だが——何もないままほっぽり出されても、と思うからこれ以上は考えない。

本当に幸運なのだろう。

——いや、不幸だけだね。

今現在、俺は神剣とやらを使う特訓をしている。

「共鳴せよッ！……出ない。」

「イリス様！ガンバレ！イリス様！ガンバレ！」

未だ一回も成功はないけれど。

あの後、気絶した俺を無理やり馬車内にいれて、レシエントへと帰った。俺は起きた瞬間に、彼女たちのところにいき全力で御礼をいって、ルビーになにがあつたのか聞き、この神剣についての技を教えてもらった。

若干意識があつたために、できるかと思えばさっぱりできない。共鳴している感じ。

ルビーは杖へと入り、杖を剣にくっつけ、『共鳴せよ！』と叫び続けるがそんなものはできない。

キーワードとかそういうレベルのものじゃないのだと思う。

感覚、という曖昧な表現しかできないが、できないことがそれを証明している。

——二度とあんな無力を見せつけられたくない。

数の暴力、しかたないといってしまえばそこで終わり。終わらせるか？と問われれば全力で断らせていただく。

だからこそ、今はひたすらに特訓。

——といつてもひたすらに叫んでいるだけなんだけれども。ファイが来ては不思議そうに眺めて帰って行く——うう、恥ずかしい。

だが、それは言い訳だ。だからずっとやらなければいけない。

あの感覚は、なにかが当てはまったような感覚だった。

カチリと歯車が当てはまった感覚。
それを思い出して、叫ぶ。

「共鳴せよ。」

だが何も起こらない、アア…と息を吐いて座り込む。
そう簡単にいくわけもないか。

とりあえずゆっくりと目をつぶり、俺は言葉を小さくつぶやいた。

「…味噌汁が、飲みたい。」

これが入学式前日にはいた言葉だ。

入学式、買っておいた制服をきて、俺は学院校内へとはいる。パリッとした新品の制服は、高校の入学式を思い出す。

制服の新しさ際立つ臭い、そして触れたことないような材質。そして、顔の知らない生徒が横を歩いているという緊張感。

不安もあつた、いじめにあわなかなんて考えたこともあつた。

——そんなことを思い出し、俺は掲示板の前で自分の教室を調べている。

「四号棟、三階——」

見つけたものを小さくつぶやいて、脳に入れて向かう。試験時に場所を把握した。

カツカツとまっすぐに歩いていくと、煉瓦造りの街道がみえる。

「なんだかしらないが——たまに原始的で、たまに近代的だよな。」

舗装された道路、シャワー、だが料理はかまど。

そして銃の無い世界観。兵器とよべるものはなく、剣と魔法が存在しシャワーによるものは魔力をもつて動かす、マジックアイテムのよなもの

科学という存在はあるものの、それは薄い。

物理学、数学などの分野はあまりにも知られている程度が低く、そのかわり魔法学が異常なほどに高い。

調べてみれば数学は足し算引き算かけ算わり算さえつかえれば、普通よりも高いというほど。

大学などで習った理系分野など、この世界にとってはレベルが異常といえるレベルなのだろう。

——まあつまりは、使うことがさっぱりないわけだ。

小中高と、正直いつ使うんだよなどと思って勉強してきたわけだが、たしかに大人になって、勉強してきたおかげで『選べる権利』というものを取得した。

だが、その数学と物理学という勉強もこの世界では希薄なものだ。

塩は俺のいた世界よりも少し高い程度

砂糖など高級品

ケーキなんてものは作ったらいくらになるかわからない。

大量生産ということが魔法にはできないからだろう。

——いや、科学というものを教えたとしても、何百年とかかるだろうな。

エネルギーの変換とか、そういうことを教えてもどうせクエッションマークを連打されるだけだ。

この世界観で俺はなにをするべきか——

「ハッ！？、俺は何を考えているんだ！？」

そう考えておいて俺は頭を左右に降った。

そんなことを考えるから、変なことにつっこんでいくのだと。

深呼吸をして、上を向く。すでに行くべき場所にはついていて、階段を登るだけだ。

四号棟へと向かうと、教室がそこにあった。

専攻する学問別で集まり説明をした後に、学院長とやらからのお言葉があるらしい。

どの世界でも、偉い人のお言葉は長いのだろうな、と思ってため息を再度ついた。

結局長かったので、略させていただく。

この学校は基本寮制だ、どんなやつでも学校に入る。

特待生制度というものでも、表向き変わらないらしいので、ひたすらに隠し通そうと思いつながら、俺は寮へと向かう。

人がたくさんいる。

男子寮女子寮というものはない。実力主義として、能力別で場所が変わるというものだ。

上にいけばいくほどにいいところに行く。つまりは上の階にいくわけだ。

正直いちいち変更されればめんどくさくないか？など思ったが、変わった瞬間に部屋の荷物がすべて転送されるらしい。

魔法があるからこそやれることなんだな――。

最初は試験による結果だ。俺はとりあえず受付へいくと、鍵が手渡される。

ついでに、この学校に階級をいばる奴はいるが、基本的に優遇はされない。

「一番最初が階、下は号室になります。」

そういわれ、俺は鍵をみる。

908

9階の八番号室、ということだ。

たぶんこれは最上階になるのかな？

そう思っ俺は歩きだす。

転移装置というものがあり、それに乗れば持つている鍵を理解して、その部屋まで送り届けるシステムらしい。

鍵がついているのは転送装置が壊れていたときのためだ。

乗って転送され、じぶんのへやへと到着する。さすがに眺めがいい。ああ、とりあえず一緒にして、不純異性交遊などの行為がされないか？などといっても問題はない。

自分の部屋には誰もはいれない仕掛けになっているらしい。完璧な学習専門の学校だな、なんて思いながら俺は持ってきた荷物を備え付けのベッドに荷物をおいた。

まあ、だからこそ寒気のある視線は感じないのだろう。

杖を袋から取り出し、ルビーを解放する。『妖精族は絶滅寸前』というアーティさんの情報をえていてよかった。

ルビーはでてくるやいなやクルクルと回転して部屋を回っている。

「わあ豪華豪華！」

その様子に和む。

寒気もない、すばらしい日常は俺を手に入れた。

「明日は学校の設備についての説明——明後日から本格的な授業」
そうポツリとスケジュールをつぶやいて俺は目をつぶる

眠る為に——

「あら？もつねるのですか？」

とびおきた

「え、ええ？ええええええ？」

「あ、起きましたね」

セレミアさんがそこにいる。なぜだ。

「あ、なぜーってききたいのですか？私この学院の学院長の孫なんです。」

what!?

「う、ううえいいい」

「まあうれしいだなんて！」

悲鳴とつめき声の融合のような言葉を発すると完璧に勘違いされる。指で鍵をクルクルまわしている、鍵には番号がない、つまり――

「マスター…キー？」

「あ、そうです。といっても室内にその人の鍵が存在することが条件としてありますが。」

「時間とかは…」

「ないです 室内での取締などでたまに使われますから、臨時的にということですよ。病気などで危険な状態な人がいたら危険ですし」

あれ？涙が流れてきた。

最近セレミアさんから日頃感じる寒気を感じるのですが、どうしたらいいでしょう？

神様、どうかこの問題を解決する方法をこの私目にお教えください

『無理』

なにが幻聴が聞こえた気がした。
無理なんてことはないよね！神様なんだから！

こんどは何も返って来なかった。

第九話目『変態紳士』（前書き）

誰も死なずにHAPPY END？

作者は時々裏切るよ？

最初からセレミいやなに、ちよ、おま、ごめんなさい！
痛い痛い痛いッ！ギブ！ごえふえいわえんふうい

第九話目『変態紳士』

太陽の眩しさに目が覚める。

高いだけで何も嬉しくないこの部屋に、俺はひとり、ぼおっとながら体を起こした。

欠伸を、一回。

そしてそのまま立ち上がり、俺は体を起き上がらせる。ルビーは目をこすりながらふらふらと飛んでいる。

頭をパァンツと叩くと、目が冴えたので俺は洗面所へと歩いていった。

洗面所はひとつの部屋にひとつである。共有の洗面所はあるが、大体は自分の部屋で使われる。

風呂は、部屋にシャワーのみであるが、公衆の風呂があり、そちらにいく人も居る。

風呂は大きく、綺麗だった。

あまりこの世界の風呂というものを知らないので、一度いつてみると、俺の知っている日本の風呂と何も変わらずそこにあった。

…噴水みたいなのがあること以外は。

洗面所についている魔力装置へと手をふれて、魔力を注入すると、蛇口から水が流れる。お湯を流そうとすると水よりも力を使うので好きではない。

魔法をつかえばいいんじゃない？という疑問に関しては、何故こんなことに魔法を使うんだ、という常識的なものがあるため。

そもそも寮内での魔法の行使は禁止されている。

顔を洗い、時計をみると5：00分を指している。
ついでにこの時計も魔力で動いている。自分で入れろってことらしい。

俺は遠くにある剣をベッドの側に置き、寝巻である服の上を脱ぎ始める。

「ふうっ」

「おはようございます」

「あ、おはよー」

「うわあっ！？いきなりでてくるなあっ！？」

「おはようございます、ルビーちゃん。あら、すみません。服を脱いだ瞬間には行って来てしまつとは…これはもしかして運命！？」

「どんな！？」

「女性の口から言わせるものじゃありません。」

最近バグリ具合が狂気の域に達しているんじゃないかと思う少女、セレミアさんご光臨。

昨日、マスターキーで入られてから、すでに諦めきっている。

というか、諦めているからといって普通にしている自分自身に驚きなのだが。

「修練でしょうか？」

「あ、うん、そうなるかな…」

女性と話すのはやっぱりドキドキする、甘い香り、柔らかそうな肌、そしてかわいい顔、それらが俺をドキドキさせるのはしかたがない。

——不法侵入されている時点で、そんな気持ちは微塵にもないけれど

「ハアッ。」

「どうかなされました？」

「いや、なんでもないよ。」

個性的な女性ばかり何故知り合いになるのだろうか。

「じゃ、俺は行く——よしっしょにですよ。」

「後々でもいいじゃないですか。」

「いや、うん、その後何されるかわからないから。」

「あら、私がそんなことする風にみえますの？」

いや、……………ごめん。

「そんなことないさー俺、ちゃんとセレミアさんのこと信じているさー（棒読み）」

「まあ！愛してるだなんて！」

いや、うん、ええっと、どうしよう？

この人との会話は終わらない、そう悟った俺は剣と袋をもって、もう漁されてもいいや、と半ば自棄状態で外へと出て行った。

――寮前

手を上へと伸ばし、伸びをする。

そして手を戻し、俺はゆっくりとあたりを見回した。

煉瓦の街道、それ以外は整地された森などがあり、そこへとはいってみる。

結構大きく広場のようになってい場所があつたら楽なんだけどな、なんて思いながら歩いていると、広い場所にでた。

大きな門がある場所で、門の裏側をみてるが、門の裏側は裏側なだけであつた。

門のみがそこにある状態だ。

「ま、いつか。練習練習」

門が気にはなったが、気にしないことにして俺は剣を抜く。そのときだった、森の向こうから気配がした。

セレミアさんだろうか？なんてみてみると、金髪がいた。

「この場所で剣の訓練だなんて、無粋だな。」

クールな男性、白いYシャツをきて、この学院の紋章をつけていることから生徒だということが見て取れる。

「そんな君はラッヴーン！がたりないよね。」

訂正、変態だ、まごうことなき変態だ。

「むっ、今君は僕を変態だと思ったね。」

「さて、ダメそうだし、どっかいこうか。」

関わっちゃダメだ、そう思い歩きだす。そうすると腰に重みがあることに気づいて見てみると、金髪変態が腰にしがみついていた。

「まってよぉー！無視するなよぉー！」

「気持ち悪い！」

「気持ち悪いなんていうなよぉー！僕たち友達だろぉー！」

「いつ誰がどこでそんなことになっているかさっぱり意味不明の上
できればお断りさせていただきたく存じ上げます！」

「そんなこというなよるばっ！」

あ、思わず剣で殴ってしまった。

解放して数分で起き上がる変態。

「フフツ、手を煩わせたようだね。ジョン。」

「誰だそれは。」

「御礼に教えてあげようッ！この僕の美しい名前をッ！」

「さて、いこうか。」

「無視するなよー！いじめ反対だあー！」

「ええい聞いてやる！聞いてやるからッ！」

そういうと、いきなり二回転したかと思うと、髪をかきあげる。
そしてフウツと息をはいたかと思うと、背中を反らせていく。

そしてキュピーンツという音をどこから建てたかと思うと、また回転し始める。

…なげえ

「僕の名前はジェイク、ジェイク・ファメリク・フォン・フラウデリカさ！ファメリクは僕が父から土地管理の訓練などのために、ある程度は父上がやるけれど、貸してくれた土地でね！いい土地なさ！」

「うん、そう……ん！？」

「どうかしたのかい？」

「フラウデリカ…もしかして妹とかいる？」

「双子だけど、いるけど？」

——ミーナの兄か…

………似てないな。

「で、一つ聞きたいんだけど、この門、知ってるみたいだけどなんなんだ？。」

「それを知らないなんて、ロマンチックのカケラさえないんだなあ、ふつでも僕が教えてあげるから君も今日からロマンチック団の一員さ！」

「全力で断る。で、なんなんだ？」

「愛の門、ラヴユーン！」

なんだ、口癖なのか、そのラヴユーンって。

「愛の門？なんだそれは？」

「愛する者全員がこの門に触れると、美しき力を手にするであろう、それが伝承ッ！」

お願いだから腰をフリフリと左右に動かなさいでくれ、目が死ぬ。
愛する者全員がこの門に触れると——って、全員ってなんだろう？、
この世にいる人間全員か？まあそれはいいか。

「なあミスタ・フラウデリカ。」

「なんだい水くさいな、僕らの間では呼び捨てが主流だろう？」

いつそんなこと決まったんだ、というツツコミを抑えて、俺はコクリとうなづく。

「じゃあジャイク。」

「なんだい、この紳士になんでも聞くが良い！」

——変態紳士か。

「なにか今とてつもない変換を行われた気がするよ。」

「気のせい気のせい、とりあえずここら辺になにか訓練できそうな場所ないか？」

「訓練できそうな場所？ふむ——そういえば西にちよつとあったところにあつた気がする。」

「む、ありがとな、ジャイク。」

「友の頼みなのだから仕方ないモノさ。」

「うん、もういいや友達で。」

言葉の通りいってみると、たしかに広場のような場所があり、今日からここで訓練しようと思い、剣を振るつた。
未だ成功はない。

ハアツとため息をついて、ある程度疲れてきたところで切り上げた。
帰ってみると6：30くらいだった。

意外と良い時間帯じゃないか、と思って食堂へいくと、あまり人数がいなかったが、気にしないことにした。

ジェイクとセラミアさんがいつの間にか横に座っていたりしたが、食べ終わった後にミーナさんたちがはいつてきて、先に帰ったジェイクについて聞こうと思ったが眠そうだったので、さすがにやめて、俺は自室へと戻る。

シャワーを浴びて、制服に着替え、ベッドにおもむろに座ってちよつと考え——

「——おかしなやつらが増えてきた…ッ！」

ちよつと先行きに不安になったりした。

第九話目『変態紳士』（後書き）

二次創作を書くとしたら

ネギまならアスナ（中学1年）に一般男性を憑依させます。

ゼロ魔なら主人公に大嘘憑きをつけて送り出します。

めだかボックスなら『進化』というチートな異常をつけていきます
アビスならアッシュにアーチャーでも憑依させときます（原作終了

設定は嫌になるほど細かくするだろうな…

第十話目『沈黙の女神』

『レシエント魔法学院』

『レシエント』、中立国家、平和の象徴としてもいわれるこの国家は、三国の国からたくさんの人々が魔法の研究と勉強のためにこの学校にくる。

だからこそ色々な人々が来るものだ。

「では、施設の紹介をはじめますね」

そついつて学生証を配り始めた女性、『アメリア』苗字のほづが『アストアリア』なので、アストアリア先生とよばれ親しまれている女性だ。

クリーム色の髪で、蒼い目をしている。

その女性が学生証を配り、俺の元にもくるので、それを言われるがままに開いてみる。

そうすると魔方陣が浮かび上がり、文字が書き込まれる。

『検索』

「これは、口でいえば自動で検索されます。ではみなさん——」

「先生。」

先生がおそらく『言ってみましょう』とでもいうつもりだったであろう言葉に、割り込む生徒がいた。ピンク色の髪をした少女、その隣にいるのは蒼い髪の少女がいた。

「あら、メリアルさん、なんでしょう？」

「——言葉が話せない人はどうすればいいのですか？」

そう聞いてくるメリアルさんとやら、その少女に向けられたのは嘲笑だった。

『魔法は言葉というものが大切ですからね……といってもこの向ける態度はあんまりだと思います。』

俺の制服のポケットにいるルビーが布により閉鎖されている場所にいるせいか、あまり聞き取れないが、グチグチと不満をいった。布によりあまりみえていないだろうが、嘲笑の声に怒りを覚えたようだ。

「——その人は心で念じて魔方陣を触って頂ければ大丈夫ですよ。」

そういつて先生はクルリと一回転する。そして話を初めて行く。

俺は後ろで、小さくメリアルさんが、蒼い髪の少女の背中をポンツと叩くのを見て、蒼い髪の少女が嬉しそうにしていたのを見ていた。

「（——機会があれば話してみようかな）」

本当に、機会があれば、だけど。

「学院施設」

そついうと、魔法陣が起動し、幾つもの項目が出る。

【魔法学】

その項目を押せと言うから押してみると、幾つもの説明が始まった。

めんどくさいからまとめさせていただく。

『学習』

『研究』

『実践』

この3つからなる魔法学。

『学習』

・ 四号棟、一階～四階

・ 魔法を学習する授業

・ 心構えについて

『研究』

・ 四号棟、五階から八階

・ 魔法を研究する

・ 心構えについて

『実践』

・ 魔法実践館（体育館の奥にあった、試験場所

- ・魔法戦闘を学習する
- ・心構えについて
- ・注意事項

——それのみだった。

正直、これ以上いうことはなにもないだろう。そのまま連れられて施設見学をやればすでに昼休みへと入っている時間帯、先生は、じやあがんばってね、なんていつてどつかへいつてしまった。

「——さてどうするか？」

飯を食べる、というのは代わりはないが、誰と一緒にたべようか。セレミアさんの視線を感じ、そちらに目を向けると、一瞬で目の前に来ていた。

なんだこの速さはッ、彼女にとってすでに常識とは塵気楼か！？
そこにありそうでないものなのか！？

呆然としていると、セレミアさんが声をかけてくる。

「いつしよに食べません？」

そう聞いてくると、俺のほうにいつきに視線を感じた。
推測するに、セレミアさんはこの学院の孫だ。つまりこの国の代表と言える。

しかもこの国は中立国家にして一国ほどの権力をもつという。
三国が共に統治している、だが、この国はどこにも属さない国家だからこそその権力と言える。

お近づきになれば、結構優遇されるかもしれない、そういったものからだろう。

睨みつけるような視線を感じながら、俺はどう拒否するか、なんて考えてみるが、腕をつかまれる。

「ほら、セレミアがいつていつてんでしょ？」

そういう少女は、ミーナさん。

さらに騒々しさが強まるが、これを引き起こしている二人はとくに気にしていないようだ。

なんだかわからない、が——なにか危機のようなものも感じる。

「——ミーナさんは、なぜここに？いなかったよね？」

そういうと、ミーナさんはお退けて顔を赤くする。

「寂しかったのですか？」

「うつさい！」

セレミアさんの言葉に顔をさらに赤くして否定するミーナさん、ああ和むわ。

「ああもうこい！こいちくしょー！」

本当に貴族なのだろうか、と思える自棄糞な感じの言葉で俺はひっぱられていく

視線は永遠と続いた。

視線を受けながらの昼食、気にしない二人に対し、気にするのはおかしいのだろうか。

そう思ってしまう俺はおかしくないと思う。

二人のモフモフとサンドイッチを食べるところをみて、セレミアさんもいつもこのくらい普通だったらなあ、と思いながら俺も頼んだ料理をたべる。

スパゲッティ、ミートソースくらいならあると思ったらそんなことはなかったんだよ。——自然の旨味をいかした料理、それがこの世界の料理だ。

調味料はあまりにも少なく、それだと単調な料理の味しか考えられないが、旨みなどを活かし、そこから美味しくする。

魚介類のスープとか、にぼしのダシで作ったみそしるとか、ああいうのは調味料のみではできないだろう。

調味料に頼らないのに、味はたくさんあり、飽きることがない、——でもその例えをすると味噌汁が飲みたくなってくる。

食べ終わり、ミーナは優雅に紅茶タイム。

セレミアさんも紅茶で、俺はコーヒーを飲んでいる。

「そういえば、お兄さんにあつた。」

ゴブアツという音をたててミーナさんが紅茶を吹いた。

「あ、あらあらあ？私に兄なんていませんよ！？」

あまりにも同様していつてくるミーナさんをじっとみてみると、顔をそらされる。

「変わった——お兄さんだったね。」

「うぐうつ…もういいですわ、あの変態のことはなにもいわないよ
うに!」

あ、妹も変態認定？

「でも、いい人ではあるよな。」

「馬鹿正直で馬鹿なのよ…」

「寂しがりやは似ていた。」

「いつしよにしないで。」

真顔で怒るところを見ると、マジで嫌っているのだろう…なにをやったんだ。

そうして話していると、気配が背後にした。

振り向いてみると——ジェイク。

「ここにいたのはマイエンジェル、アンドマイフレンド」

そういつてこちらにやってくるジェイク。もう慣れた。

あからさまにミーナがゲエツという声をだした。——貴族の上女性
がはしたない。

「うむうつ、ミーナがこんなにもぼくに反抗的な視線を向けるなんて——昔は『おにいちゃん、私ね、私ね、お兄ちゃんのお嫁さんわーっわーっ!』……まったく、静かにしなさい。」

「あんたのせいでしょうが!」

「こんな子に育ってしまつて……」

ヨヨヨ……と崩れ落ちるジェイクをみて、ミーナがひたすらに「うるさーい!うるさーい!」と叫び続ける。なぜだ、なぜほのぼのとする。

「本当に仲がよろしいようで——」

「なにいつてんのよセレミア!?!」

心外そうにミーナが叫ぶと、復活したジェイクがキュピーンッという音をたてて回転する。

「永遠に仲良しさッ!禁断の愛!」

その言葉に、この場にいる他生徒が、「え、本当に!?!」などと噂をしはじめる。

「違う違う違うんだからああっ、バカアアア!」

その叫びとともに、昼食は終了した。

昼食は終了し、別れた。

そのまま中庭でも歩いてみようか、と思ったが、あまりこの学校に慣れてないのか、迷ってしまった。

ついでに今日の授業はもうない、やることはやってしまったようだ。

とりあえず歩いていると、三人の男が目に入った。

なにをやっているんだ、と思ってみると、教室いにいた、あのピンクの——メリアルさんといったか、あと蒼い髪の少女がいた、その人たちが三人に囲まれているような状態だ。

「お前、しゃべれないんだってな。」

その言葉に、蒼い髪の少女はひどく傷ついた顔をして、メリアルさんは憤慨した。

「どうでもいいでしょ！？目障りなのよ！」

そう叫ぶと、少年たちは嘲笑する。

「貴族に逆らうつもりなのか？平民が。」

「そうだそうだ、生意気なんだよ。」

そういつている三人に不快感を感じた。ルビーがポケットの中から

はい出てくる。

「なんなんですか、あれ……」

そういつて不快感をあらわにするルビーに同意したいところだが、これからどうしようかと思う。

行ってもいい……だけど、俺はあまり目立ちたくはない。

——いや、そんなことをいつている場合ではないだろう。

「口も訊けない出来損ないが、なんでこの学院にいるのかわからない、同情でも買ったのか？」

そういつて嘲笑をし続ける男子生徒、ギャハハと笑う声の不快さは果てし無かった。

「ルビー、いくぞ。」

「はいっ！」

そういつて外にしようとしたとき、男子生徒が魔法を構成するのを見た。

「だからさ、出来損ないはどっかいけよっ！」

——なんて傲慢。

怒りで毛が、肌が、ザワツという音を建てた気がする。

怒りをもって、瞬間的に男子生徒と、ピンクと蒼い髪の女生徒の間へと割り込んだ。

8秒ほどかけて出来上がった魔法は、小さな水の龍だった。

俺に驚いてはいたが、共々に吹っ飛ばせばいいなんて思っていたらしい、俺は剣を鞘から抜き出し、一撃で水の龍は消滅した。

「なッ、お前、貴族に逆らうつもりか!？」

「通りすがりで、なんか魔法がきたから斬っちゃいました。」

魔法が剣で吹き飛ばされる——その光景を見て、驚きながらも貴族のご息様とやらは俺を睨み付けて喚くように言ったので、平然とかえしてやった。

「そもそも、魔法学院内では理由無き魔法の使用は禁止されておりますが。」

「バカじゃねえの?ここは裏庭だッ、学院内じゃないぞ、バァーッ力。そもそも役たたずを廃棄する理由なんだよ、すばらしいだろ?俺がみんなの代わりに捨ててやるんだよ!」

バカはお前だろう、学院内というのは敷地内であって、建物内ではないし、私用じゃ理由にはならんだろう。

そう思っただけで冷たい目でみると一瞬怯えるが、すぐに後のやつらに声をかける。

「お前らもってよ!」

そういうと、少し怯えていた後のやつらも、笑いながらうってくる。それを剣で吹き飛ばす。

「おや、この程度でしょうか。」

三人の攻撃をただの剣でひとふりで消去。それをみた男子生徒は怯えを含んだ顔で俺をみる。

——ジェイクは変態でも、いい奴なんだな。
ちゃんと友達になれる、なんて底辺をしった俺は思った。

「チツ、なんなんだよお前エエツ。」

ルビーに目を向けて、後の奴の保護をしてくれという視線を送るとコクリとうなずかれた。
それをみて安心すると、後でジェリツという音をたてた上に、殺気を感じたのでうってくる魔法を対処しながら振り向いて見る。

——修羅がいた。

ピンク色の髪をした修羅が。

「——あんだ、名前は？」

殺気を出しながら聞いてくるので、「イリス」と答えると、コクリとうなづいたかと思うと、ギギギツという音をたてて俺の後にいるやつらをみた。

さすがに殺気に気づいたのか、貴族ご子息は怒りに震えていた。

「あんたたち、ねえ…ッ！」

ゴゴゴゴゴツという音がたっているような感じがする。怖い、ありえないほどに怖い。

「アイリスウツ…」

目を向けられた女性、蒼い髪の女性はビクビクとしながらもコクリとうなづいた。

「教えてあげるわ…何故しゃべれないのにここにこれたか、だったわねえ…たしかに言葉は大切だわ…追尾せよ、なんて言葉は策略に使えるもの。」

首をゴキンツという音を立てて曲げると、元に戻し、さらに逆の方向に動かす。

「でも、アイリスわねえ…それを凌駕するの…」

そういうと、アイリスは魔法を高速で構成する。

あいつらは8秒だったところを2秒程度で構成を完了させた。

すると、水の龍が、あいつらの80倍はありそうな水の龍が現れた。小さな龍などどうでもいいといえるくらい、まるでそれは本物のように。

「魔力が、普通の300倍くらいはあるのよねえッ！」

「ひっご、ごめんな」問ッ答ッ無用ッ！「ひいひい！」

「トラウマにでもなってるっ！」

怖エ…。

茫然としながら俺とルビーが同時にそう思った。

ドゴオオオンツという音をたてながら、水の龍は直撃し、あっけなく男子生徒は吹っ飛ばされた。

爆風から身をまもるために、魔法を高速展開し、後のアイリスさんとメリアルさんを護るために大きく展開した風の盾により、魔法は防がれた。

——あれ、俺ここに来なくてもよかったんじゃない？なんて考えながら先生たちがかけてくる音を聞いた。

理由を聞いた先生たちは、男子生徒三人は寮に謹慎させ、アイリスさんとメリアルさんは厳重注意となった。

今度やったら、たとえ理由があつたとしてもかばいきれないぞ、といって先生は去っていった。

男子生徒は次からアイリスさんをみると恐怖で顔がひきつり、メリアルさんをみると悲鳴をあげて逃げていくことになる。

俺はなぜか知りあつてしまったのを後悔しながら、もうどうにでもなれ、と開き直り、先生から止めたことによるお褒めの言葉を頂いた。

さすがに剣は危険だからあまり多用するなとは言われたが。

運が良かったか、けが人がいたとしても軽傷だということ。

ルビーがいうに、魔力をみると、俺よりも多いくらいらしい。ルビーには叶わないらしいが、そういつて誇らしげなルビーをみて、現実逃避していた。

第十一話『魔法』（前書き）

どうも、明日天気になあれです。

兄さんを昔からみているので、壊れたオタク系を書くのが上手いと言われました。まったくうれしくありません。

この物語は、主人公が壊れかけたり、ヒロインが病んでたり、清楚っぽいけど実は腹黒かったり、途中作者でも意味不明なギャグがあったり、主人公の精神がヒロインのせいでヤバくなったりします。

バハムートラグーンのあのかたよりも別の意味でたちが悪いですが、生暖かい目をして待っててくれよ！

さらまんだーより、ずっとはやい！

注意：今回は魔法について細かい説明をするためにつくりだした、話のようで話じゃないものです。説明が嫌いならみないほうがいいかもしれません。

第十一話『魔法』

朝、みるとセレミアさんが真横にいた。

飛び起きると、あからさまに舌打ちの音が響きわたり、俺はとりあえず野宿を考えようかと思った。

教室で手で顔を覆い、疲れた…とため息をこぼした。

セレミアさんは何がやりたいんだ、寝首でもかきたいのか。

怖い、怖いぞセレミアさん…

今日は魔法学の授業だ。

それは待ちに待った授業開始、魔法についての基礎知識と、応用知識を手に入れ死亡確率を極端に減らすためのものだ、もう俺の状況でそんなんで死亡確率が減るとは思ってはいけないけどね！。

しかし、諦めたりはしないと俺は叫んでおこう、心の中で。平穏な毎日とは貴きものだとなんどの世界にきて思い知らされたことかわかりえることは、この体はハプニングを呼び寄せる力でも持つてるのかもしれない。テレビでハプニング大賞人間部門があれば大賞を受賞しそうな勢いだ。

『今週の、ハプニング人間大賞は』
』

テレビでの音声が一瞬流れたが、首をふる。
ダメだ！これ以上考えるな気が滅入る！

ガラガラと音をたてて先生が入ってくる。

魔法学の専門教師だろう、昨日の先生とは違い、男性だ。

「はじめまして、ウィードと申します、ウィード先生と呼んでください。」

その一言で真面目な先生だとわかり、俺はウィード先生をみる。先生は教科書をだしてください、といわれ、誰もださないでいると、困り始める。

「あ、あれ？どうしてみんなださないのですか？」

「いえ、先生？教科書をもっていないのですが。」

そういうと、先生は驚き、髪をガシガシと掻いた。

「生徒証をだしてください、そこから教科書を読み込めます。」

アストアリア先生説明してなかったんですか…とウード先生は、ため息をついて小さく言った、俺は言われたとおりに生徒証をだし、魔法学、と検索をすると、教科書と書かれた部分がでてくる。

それをみて、苦笑いしか浮かんで来なかったが、とりあえず読み込みをすると、空間に文字がでてくる。

「生徒証を右から左に指をつけて動かすと、ページがめくれます。ついでに消すにはちょんつと押すだけで十分です。展開はどこでも可能です。」

そう一息にフィード先生は説明をして、みんなが展開をしたのを見ると、コクリと満足そうに頷き、話をはじめた。

「では、続けましょう。今日は魔法学の基礎からはじめましょう。」
そういつて、フィード先生が黒板に手を当てると、文字が現れる。

『魔法学基礎』、そう一文が現れ、もう一度フィード先生が黒板に触れると、さらに文字が浮かび上がる。

「魔法、とは8つの属性からなるもので、その理論は細かくは設定されていません、人体の魔力なるもので精霊に干涉し、魔力を食わせる代償として魔法を使わせてもらう。そういったものです。」

魔法とは、火、水、地、風、光、闇、時、空の8つがありますが、大抵は自然四大元とよばれる、火、水、地、風を使える方が多いで

す。」

「自然四大元？」

『自然に接する四つの大元といわれています。魔力なくとも人の手で変えられるもの、というものの4つです。』

俺が疑問をボソリと口にだすと、ルビーがポケットの中から説明してくれた、なるほど。

「というか、4つを使える人ってことは、使えない人もいるのか？」

『はい、事実です。イリス様と私は、偏りがありますが、全属性を使用可能ですが、他の人はそうはいきません。』

「——目立つな」

『目立ちますね。』

よし、隠しておこう！と心の中で決めた。なんて有意義な授業だ。

「過去、全属性使用可能な方がいました。その方はエレメンタルマジシャンとよばれていましたね。代表格はみんなも知っているであろう、伝説上の勇者です。文献でしか残ってはいませんが、剣術も美しく、魔法も天才的、その傍らにいた使い魔も最高峰の力をもっていたとあります。」

「なんつーチートだ。」

『会ってみたいものです。』

そういつて、俺は笑った。フィード先生はコホンツと咳をすると、息を吸ってさらに続ける。

「そもそも、現代に光、闇、時、空を扱うものは稀で、時、空の魔法を使えるものは、3つの国の最高峰魔法使い、宮廷魔法遣いの方々しかおりません。」

「（うん、時とか空とか絶対に使わないときめた。）」

「その他学科でもありますが、魔法剣、魔法科学、魔法薬などがあります。魔法学の派生といってもいいでしょう。途中まで、魔法学の基礎をあちらでも叩き込まれますので、たまに授業をいっしょにするかもしれませんね。といっても、こちらでは魔法のスペシャリストを育成するための学科なので、途中で道は途切れますが。」

そういえば、ミーナさん、ルナさん、アリスさん、ジェイクも学科何なのだろう？と思いついて後できいてみようと思った。

「では魔法の発動についての基礎説明を始めます。あ、あとついでにいいですが、こちらの学科でも、魔法という観点からみて、魔法剣や魔法薬、魔法科学、魔法歴史も触れますから。ついでに歴史については必要という見方をしています。…では、魔法発動の基礎についての説明です。魔法発動は、魔法を構成することからできあがります。魔法構成はいつてしまえば魔方阵を書くということです。」

そういつと、先生は魔法を構成しはじめる。2秒くらいで出来上がったものに触れると、小さな火の玉がでてくる。

「留まれ」

そう一言を告げると、そのまま火の玉はふよふよと浮いている。

「魔法構成というものは、初期の状態だと、指に魔法を集中して書きますが、慣れてくると、魔力を自在に描くことができます。本当に慣れた、それも才能をもった人なら、一塊の魔力から一瞬で魔法を構成する方もいますね。この教室では、審査官の話では2人ほどしかないそうです。一人は大変優秀だとか。名前は言いませんが、がんばってください。」

そういつて黒板にフィード先生は体を向けて、カツンツと黒板に杖を当てた。

黒板に文字が現れる。

それはしっているものだ、魔法の構成の魔法陣の形。

火：正三角形
水：丸
土：正四角形
風：だ円
光：ひし形
闇：長方形
時：二重丸
空：台形

「では魔法陣構成の形ですが、これは精霊の象徴とする図形と言う

ものです。それを合図にして、その精霊がやってくるものになります。」

そういうと、次は丸を書いて行き、水の塊をだす。

「では、今度は魔法の属性についての説明です。」

そういうと、ふよふよと浮いている、火と水の塊をみる。

「ぶつかれ」

その一言で火と水が合わさり、対消滅をした。

「さて、8属性ですが、自然4大元というものが良い例といえます。…そう、魔法の強弱についてです。火は水に弱く、火は風に強い、水は地に弱く、火に強い、地は風に弱く、水に強い、風は地に強く、火に弱いといったものです。といっても、『強すぎるものに、たとえ属性の優位があっても抵抗すれば、そんなもの関係なく消滅させられます』火は強すぎると、水にぶつかれば、ぶつかる前に水は熱によって蒸発します。風は、強すぎると、逆に火の力を利用して相手に攻撃をできます。水は、強すぎると土をおし流し、地は、強すぎると風など無意味とします。では、光、闇、時、空の属性について説明しますが、これについては特に弱点といえるものがありますね。あえていうなら、光と闇は対消滅しますし、勝つならば時は空間によって抑え込むか、空間は時と相対し、無理やり力業でねじ伏せるしか対抗手段はありません。これは光と闇とも同じことです。」

「（ポケモンとは違うし、よくある魔法の設定とはちょっと違うような…）なあなんで土が水によわいんだ？」

『えっと、水は土の壁で守ると、吸収し、すべてを無効化します。乾いた土などを魔法で使うと、完全に無効化される上に、その土をゴーレムに使うと、逆に固まって強くしてしまうからです』

そういうものなのか…、そういわれればそうかもしれない。

『しかし、さきほど先生が言われたとおりに、つよすぎれば敗北しますね、押し長されますし。土と水はそのところの力の均衡が微妙なんですよね。』

難しいものなのだな…と思い、先生を見る。

「では——ふむ、もう時間のようですね。」

時計をみると、授業の終了三分前程度だった。

「では次回は、魔法の構成による図形の内部についての説明をしましょう。では起立、礼」

ピシヤリ、と先生がドアをしめて少し経つと、鐘がなる。
有意義な時間だったと思った。

第十一話『魔法』（後書き）

たぶんこれで基礎の設定は終了ですね…

というかほとんど終了です。

魔法の構成とか説明されて誰が楽しいのですか。

魔法についての基礎設定は終了、世界観は後々です。

学院編が終了次第、この物語の世界設定とキャラ設定を公開しよう
かとおもいます。

第十二話目『戦へのカウントダウン』

—— ????

暗い空間の中、黒い鎧をきたたくさんの軍勢がそこにいた。ざわざわと音を立てている。

そして、その空間の中にステージがポツンとあり、そこからひとりの人物がやってくる。

雰囲気から黒騎士という言葉が生まれる。

そして、黒い鎧たちの喧騒は、その黒騎士が現れた瞬間に止り、静かになる。

『魔王様が復活される』

黒騎士のひとことに、わぁっと軍勢から声が上がった。それも黒騎士が制したところにより、すぐに収まる。

『混沌が訪れるッ！虐殺だ、我らの栄光がいまここにある！』

そして黒騎士がバツと手をあげる瞬間に、爆発的な歓声があがった。

ワァァー…

その歓声をきいて、黒騎士は満足そうにうなづいた。
そして、さらに言葉を続ける。

『だが、魔王がいるために、勇者という存在が生まれる。』

その瞬間に喧騒はすぐに収まった。

『故に我らは——可能性があるものを、殺す。』

『殺すッ！』

黒騎士の言葉に一人の黒い鎧を来たものが続く。
それに続くかのように、さらに続ける。

『殺すッ！』

『殺すッ！』

『殺すッ！』

『殺すッ！』

『殺すッ！』

『殺すッ！』

『殺すッ！』

『殺すッ！』

『殺すッ！』

『さあ場所は魔法学院！そこには憎き魔法剣使いや魔法使いがいる！勇者が現れるかもしれない、もっとも危険な場所だ！…魔王様のために！』

『魔王様のために！』

『魔王様のために！』

『魔王様のために！』

『魔王様のために！』

『魔王様のために！』

『魔王様のために！』

『魔王様のために！』

— side 主人公

バツとすぐに起き上がる。ぜえぜえと息を漏らし、頭が揺れる。ゾクゾクという嫌な予感がした。

「あの夢は——」

あの黒い鎧どもが軍勢をなしていた。あれほどに強かった黒い鎧たち。

強さというものが同じではないことはわかっている、何体かと相對したこともあったし、倒した。

今の夢が本当かはわからない、だがこれほどに嫌な予感がするのは

なぜだ。

怖い、なにかが起こりそうで怖い！

「どうかしました？」

「ああ——うつわああああああ！？」

「まあ、女性の顔をみて驚くとは——ひどいですね。」

「いきなり横にいたら驚くでしょう！？」

「いえ、もう二週間になりますし——慣れてくださらないと。」

何故俺が悪いことになっているのだろう、そう疑問に思ったことはたぶん間違ってたんじゃない。

というか、学園長もこんなことを許しているのだろうか、うら若い乙女が、男の部屋に、朝早くから寝ている間に入るなどという行為を。

「さすがに…自重してくれませんか？」

「嫌です」

それは、わかっていました。

そこでふと、汗に濡れた寝巻をみる。ペツトリと肌について気持ち悪い。

シャワーにいいこうかな、と思ってセラミアさんをちらりとみると、こちらをじっとみていた。

「なんですか？」

そう聞いてみると、真剣な顔をしてセラミアさんは聞いてくる。

「うなされていましたが――」

心配してくれたことに感謝しつつ、俺はとりあえず話してみることにした。この世界に来てから信頼できるやつなんてかぞえるぐらいしかない。だから数える数に聞いてみるしかない。

夢の内容を教えてみると、真剣そうな顔をしていたが、ニコリと笑う。

たぶん安心させるための笑みだろう。

「お爺様には気を付けるように、とでも言うっておきます。」

その言葉に若干安心する。夢だと言うのに信じてくれる。それが正直嬉しかった。

「むう、近辺に不審者が出没していたという報告を受けた、とでもいっておきましょうか。」

そういつているセラミアさんに微笑んだ。そしてすぐにシャワーでも浴びようと立ち上がる。

「あら、どこにいくのですか？」

「シャワーだよ。ありがとな。」

そういつて俺は歩き出し、シャワーを浴びに行った。

汗を流してさっぱりして、戻ったとき、汗でビショビショだった寝巻が消えていることに気づき、別の意味で汗を流した。

学校に通って、すでに二週間はただだろうか、それなりに充実していることを実感している。

男友達のジェイクは、まったくまともとはいえないが、おもしろいやつだし、ミーナさんとのコンビをみていると、なんか和む。

そんなこんなで、やたら普通とはグネグネと曲がりきった日常を送ってはいるものの楽しい毎日だ。

「——って… 戻る方法を探さなきゃ…」

手がかりは水の聖堂の水の女神であるあの人がいていた願いが叶うと言う言葉だ。

だが、試練と言う言葉も気がかりだった。

そしてこの剣について——。

たぶん、おそらくはあのときにつかった魔法剣のようなものなのだけれど。

あのとき、といって思い出せるのは水の剣。

共鳴——のような感覚。

それをいくらやってもできなかった。

掴めないことの苛立ちはあったが、諦めない。

—side ファイ

「ん、なんだありゃ？」

黒い塊が平原の向こうからくるのが見えた。

イリスみたいに魔物をひっつけて逃げてきたやつがきたものか？と思ったが、違った。

「黒い、鎧？」

一瞬で、イリスが解決した事件を思い出す。黒い鎧…やつらの仲間か！？

その瞬間、瞬間的な判断で目の前を斬った。すると、炎の弾がまっぶたつになる。

—魔法か！こりゃあ、好戦的ということだ…

戦争、なにがあつてなにがしたいのか、それがさっぱりわからない。だが、戦争がはじまることは容易に想像できた。

思わず後のやつに声をかける。

さっきから口をあんぐりと開けている奴の肩をふれると、ビクッと

して倒れ込んだ。

「な、なななんだよあれえっ」

「知らねえ、でもすまないが、ちょーつと学院長に報告してきてくんねえか？指示を貰わなきゃな。」

「あ、ああ…ってファイさんはどうするんだ！」

「あ？俺か？俺はだな——食い止めんだよ。なに、危なくなったら逃げる。」

「む、無茶だ。」

そういわれ、俺はクハツと笑う。

「無茶かどうかは俺が決める。守りてえものが家族だ。そしてついでにこの国だ！」

そういつてケラケラと笑う、引きつっていることはわかっている。

「なあに、学院には驚くほど強い奴がいる。そいつが来てくれればたぶんおそろくきつと大丈夫！」

「不安にさせないでよ！？」

「ま、いけよ！俺は…行くから！」

そういつて走り出す。無茶なことは分かりきっていた。でもさ…家族がいるんだぞ？

両親は死んだ、子供も死んだ。
でも妻がいる。

だから——俺は、やれる。

イリスが、俺の子供が生きていたら、きっと、アイツくらいなんだろうな。

第十二話目『戦へのカウントダウン』（後書き）

他の小説といっしょに書いてみたら文章がうつりそうで怖かった。
ヤバイなー、もういきにすすめちゃった。

第十三話『ファイ』（前書き）

墓の前で、少年が泣いていた。

後では近づかないで同情の視線をおくる人達。

少年はそれを感じながら、剣を握り締め、その手には少女の手が重ねられた。

第十三話『ファイ』

——レシエント・門から1・5キロ地点。

「どおりやああああつ！」

剣、門番に与えられる安っぽい剣。それがとてつもなくすばらしい剣にみえてしまうほど、ファイの戦いは凄まじかった。黒い鎧の連中、そいつらは決して弱くは無かった。いや、むしろ彼が目指していた騎士など、数人集まれば倒せるほどに強かった。だが、ファイ、彼の戦いはそれを凌駕した。鬼神のごとき強さ、イリスとの戦いが力を抜いていたと言われても信じられるほどに。

——しかし、彼はイリスとの戦いも力を抜いた覚えはない。

しかし、なぜ彼はここまで強いのか——

護るべきものがあるから

彼の背中には、大きく妻があり、その次に親があり、そのうえに国というものがあつた。
愛しているからこそ、彼はいつも以上の強さというものを見せている。

武神といわれても、彼は名に劣らない力を見せている。

黒い鎧を力をこめて吹き飛ばす、黒い鎧は彼に勇者になる可能性をみて、何十人も襲いかかる。だが彼はひくことはない、黒い津波が押し寄せてくるこの中で、ファイ・エネーシアはイリスを抜けば最強といえる力を持っていた。

「はあああああああああ」

咆哮——それはビリビリと空気を揺らし、黒い鎧をおびえさせる。
黒い鎧たちは——彼をなにと見たらうか、強い剣士？否——それは巨大な壁、鋼鉄の壁、難攻不落の城——

「がッ——」

だった。

ファイは、恐ろしいほどに『何があったのか』わからなかった。衝撃波と呼べるものなのだろうか、とゆっくりと思った。体がガクンッ——と落ちた。

黒い騎士——黒い馬、ファイの目に映ったものは、黒騎士。

「ち、くしょ——」

黒い波が押し寄せてくる。これほどの手負いだ、すぐに飲み込まれてしまう。

もう、ダメなのだろうか…目を閉じれば、走馬灯がみえた——

『あの子があのだ流行病の——』

『気の毒に——』

『ダメです！近づいちゃ！病気がうつっちゃうでしょう！？』

背中に同情と恐怖という視線を受けながら、ファイ・エネーシアはその場にたっていた。

剣を握り締め、彼は両親の墓の前で泣きもせず、ただ立っていた。

剣——それは彼が騎士団に入りたいという願いからだった。

両親はそれはそれは貧しい家柄だった、病にかかればその貧しさも加速していく。

だからファイは騎士団に入りたいという願いをもった。騎士団は高収入で、薬の金も貰える。

だから必死で両親がものを食べられる金を貯めながら、ひとり安っぱい剣で鍛錬をしていた。

その横にいる少女『シーナ・ルディク・メリファース』この土地の主の子供。

その少女はぼおつと頑張つて剣をふっているファイを毎日じつとみていた。

汗水たらし、働き剣をふり、彼はシーナ存在を気付きながら、面白がつて見ていると決めつけ、小奇麗な娘をなるべく視界に入れずに毎日を過ごしていた。

小奇麗な服をみれば、吐き気がした。

魔法学院に入りたい、でも金はない。

騎士団に入りたい、でも金はない。

だから少しずつためて、騎士団の入団試験をやれるくらいまで金のため、必死になって剣をふる。

集まるまであと少し——そう思ったときに両親は死んだ。

——ごめんね。

力のない最後の声で、力尽き、両親は死んだ。涙もせず、心というものがガラガラと崩れゆくを感じた。両親をまもるために振った剣に意味はなく。

両親はいつまでも救えない。

死んじゃった

ブルブルと震えながらは墓の前でファイは剣を強く握り締める、強く――強く。

涙をこらえ、叫び出したい気持ちを堪える。

――何も救えなかった。

心の中で叫ぼうとして、剣を叩きつけようとしたときに、誰かがその手を握った。

『シーナ・ルディク・メリファース』だった。
握って離さない少女を睨みつける。

「話せよ。」

「やだ。」

小さい返答、それがファイを苛立たせる。

「離せつつってんだろ！？お前は俺を馬鹿にしたいんだろ！？何も救えなかった、必死こいてやってたのに何も救えなかったバカだつて！いいさ言えよ！いくらでも受け止めてやるよ！事実だからな！俺は救えなかった、何も、救えなかったんだッ必死こいて、騎士になりたくて、降り続けてッ！なにも、なにも」

パンツという音が両親の墓の前で響きわたった。
ファイが茫然とし、視線を戻すと、泣きそうな少女の顔がいた。

「馬鹿になんて、しないわよ…」

泣きそうな声だった。

「あんたが、必死になって剣を降っているのに、どうして馬鹿になんかするのよ…」

そのときになって、ファイはシーナの顔をちゃんとみた。

それは、ぐちゃぐちゃになった顔だった。涙で、鼻水で。綺麗なはずの顔が。

「必死になってるあんたをみて、ずっとみてたの、あんたが願いをかなえる為に、辛くても笑顔で必死になっているのをみて、——好きになつて。それで——」

まくしたてるように、涙を拭おうともせず、さけぶように少女はいつた。

「それで——ずっとみてたかった、あんたが…ファイが——護るところを。」

その一言が終わって直後にファイは号泣した、押し止めて居た涙が流れ出し。

両親の墓の前で、少年と少女の泣き声がいつまでも響きわたった――。

思い出して、ファイは笑った。諦めかけていた心を、今ここで失った。

ファイを殺そうとした黒い鎧たちを、怪我も気にせずに薙ぎ払う。

「護る所をみせるんだって言ったよなッ！」

一人目を切り裂いた。

「死なないって、約束したよなッ！」

二人目、三人目――

「だって、俺は――アイツを護る騎士なんだからなッ！」

四人目、五人目、六人目。

なにをいつているのか、黒い鎧達にはわからないだろう。
にいつとファイは笑って、言い放った。

「たぶんこれが、愛の力ってやつなんだな！」

くせえセリフだ、とファイは笑いながら、その歩みは止めない。
強く強く強く、前に前に前に

迫りくる、復活した鉄鋼の壁に、黒い鎧達は思わず下がる。——な
にをしても押し返せないと本能がいつている。

しかし——次、あのわけのわからない攻撃が来れば死ぬ——

一瞬、一瞬だが、彼の前に攻撃が見えた。

その時だけ時間が止まるようにみえた。

「ごめん、シーナア……」

彼女の泣くような顔が見え——今度こそ、終わりだと悟った。

「終わらないよな？フアアアアイ！」

目の前にイリスが現れた。

——その一撃は——敵陣をまっぴたつに吹き飛ばす。
その威力に啞然とし、すぐにハツとする。

「こらイリス！当たったらどうするつもりだったんだ！？」

「ぶつつけ本番で成功したんだからいいじゃないか！」

軽口を叩き合い、笑いあう。そしてファイは意識を失った。

「ルビー！二発目なんてぶっちゃけうてそうにないからもどつてくれ！で、ファイの治療を！」

「アイアイサー！」

ルビーをイリスは戻し、剣を相手に見せつける。

イリスは、後の方で、ファイが門番仲間に引きずられながらルビーに治療されていくのを見た。門の方に、心配そうにみる、美しい女性をみた。

そして、敵をみた。

自分でもなぜ出せるのかわからないほどに、濃密な殺気を出しながら。

イリスは、叫ぶ。

「来いよ、黒鎧共！兵の数は十分か？」

ちょっとネタにはしまったことを後悔した。

第十四話目『勇者』

—イリス

「で、あるからして——魔法という構成の——」

魔法学の授業中、ガリガリと書き込み続けていると外が騒がしいことに気づく。

「黒い鎧たちの魔力？」

「——はい、感じます。」

近い——いや、遠い？

距離がわからないために人数がわからない、遠ければかすかしか感じないし、近ければ弱ければそれもかすかしか感じない。

——考えるに20人くらいだ。『目の前にいれば』

そう考え、人数の多さに気づいた。

バツと立ち上がる。

「——むー、君は、イリスくんだったな、どうしたのかね？」

「イリス様、どうかなさいまして？」

「……来た。」

—side セレミア

イリス様が突然立ち上がる。

魔法の授業は一際努力するイリス様が、先生が不思議そうに彼をみるが、彼は何も言わない。

「イリス様、どうか耐えて？」

ためしに聞いてみたところ、たいへん険しい顔をしながら、イリス様はいった。

「…来た。」

来た？来たとは――

『緊急事態発生です。生徒は直ちに非難を…！』

――！？

—side イリス

場が騒然となる。先ほどの緊急事態警報、なにか――

「君！なにかね！門番が入ってきていいところだと――」

「ファイさんがっファイさんが危ないんだ！」

――ファイが危ないだって！？

驚きながらすぐにそちらに顔を向ける。

「ファイがどうしたんだ！？」

「あ、ああ！一人で向かって言って……」

それを聞いただけで十分だった。俺はポケットの中にいるルビーに声をかける。

「ルビー！」

「はい！」

その一言でルビーはひょっこりできて、空間の魔法を構成、展開し、鎧が出てくる。

それをまとつて、俺は窓から飛び出し、魔法を構成、風の魔法で、吹き飛ばす。

「うおおおおおおお！ファアアアアアイ！」

剣を引き抜き、杖を掴み、魔法を構成し続けて――見えたッ！魔法を構成、遠くの光景をみる。――ファイが危険なことがわかつ

た。

——どうする？

魔法では、あれほどのファイの周りにいる大群を倒せるわけがない。ならば——

「賭けるしかないってことだなッ！ルビー！」

「はい！」

すうつと息を吸い、——吐く。

剣が振り下ろされた。

心を焦らせるな。

逆境を——味方につける。

「共鳴せよ。」

なにか、いつもと感覚が違った。

混ざる感覚——この剣と、自分が。

『水の剣は圧力の剣、単体では強くはない、ですが水とは最も弱く最も強い——それは外部の力というものと受けやすいから——ならば水とは使うものの力——』

なにか、声が聞こえたような気がする。

——まざれ、まざれ——そして、力を…注ぎ込めッ!!

思い出せ、思い出せ、思い出せ、思い出せ

『アイツ』の剣を

ゴウゴウと鳴り響く水の剣を

—sideセレミア

シンという音が聞こえた気がした。

みんながイリス様が飛び出して行った窓をみていた。

歴戦の勇士を思わせる鎧、そしてあの剣——聞いたことがあるような、見たことがあるような。

——イリス様、あなたは…

「勇者…」

先生がポツリと声にだした。

それにより、カチリとピースが当てはまる。

「勇者…？」

ありえない、でも——なぜか納得してしまう。
どうして…？
なぜ…？

——sideイリス

—ファイが諦めたような顔をした。

「ごめん、シーナア…」

その言葉がかすかに聞こえた。
それを聞いた瞬間、思わず、叫んだ。

「終わらないよな？フアアアアアイ！」

叫ぶ、叫ぶ、叫ぶ――

ビリビリと響きわたる水の剣の一撃と、自身の声に驚いた。

――全くファイの奴、結婚しているのに死ぬなんてねえよ。
俺なんて、結婚もしてないのに、告白する日に死んじまつたんだからな。

「こらイリス！当たったらどうするつもりだったんだ！？」

ファイの声にニヤリと笑い、すぐに顔をかえて

ぶつつけ本番で成功したんだからいいじゃないか！」

そういつて、笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8063q/>

それはひとつの奇跡

2011年3月6日15時22分発行